

昔。現在小学生のピチピチ元気な子供達には、自分の人生を通り越してもまだ追いつけないほど遠い昔。

最近。現在老衰し、明日には動かないタンパク質の固まりになってしまっても一向に不思議ではない。そんな十年や二十年程度は最近と豪語する動く化石達にとっては最近。

そんな時期の出来事である。

日本の、とある全く開発もされていない人里離れた山の奥での出来事であった。

その山奥には、小さなダム程度の大きさに相当する台地が存在する。

水源が無いので作物も出来ず、農村も出来無い。鉱物も取れないのでなんの価値も無い。バブル絶頂期であっても一円も値段が上がらない。

そんな、地主である老人にとっては無価値そのものの

土地であった。

ある時、なんとかしてこの屑の様な場所を諭吉さんに変えられないものかと思っていた老人に、願ってもない話しが舞い込んできた。

なんと、場所的に險しすぎてゴミの最終処理場にすら出来ないこの土地を、残らず買い取ってくれるという変人集団が現れたのである。

変人集団は何やら顔が怖かったり目がイツてたりして怪しかったが、無論、老人はその話に飛びついた。

相当安く買い叩かれたが、役に立たないのだけが取柄の土地だ。

老人にとって、何も無い所からお金が沸き出してきた様なものである。しかも、安くても売った土地はかなりの広大さであった。

残り少ない余生を楽しく過ごすには、有り余るほどのお金が転がり込んできたのである。

老人は喜々として土地を売り渡し、孫に囲まれて楽しく余生を過ごし、息子達が遺産争いを起こして憎しみ合

う程の遺産を残して幸せにこの世を去りましたとき。

メデタシ、メデタシ。

と、話は戻って現代。

そんな運の良い老人の話と関係が無くもない出来事が、鴉達が美術館で戦ったりしている間に起こっていた。日本上空を、黒い迷彩を施された航空機が飛んでいる。30人〜40人は優に乗れると思われる大きさの飛行機だった。

その飛行機が、ゆつくりと旋回しながら例の老人の土地だった場所に落ちてくる。船体が復帰する気配は無い。

日本の山奥であわや墜落事故か！と思われた。

しかし、その飛行機は機体を殆ど軋ませず普通に、むしろ見事に着地した。

飛行機が見事に着地してのけた場所、そこは老人が所有していた頃ならば只のススキ畑であったはずである。

が、現在は滑走路が引いてあり、着陸誘導設備があり、着陸帯があり、誘導路、管制塔などがある。

つまり、完全に空港と化していた。変人集団がやった

のである。

一体、どれほどの金をかけたのであろうか？そもそも、大して問題は無いとしても、国はこんな場所に空港を作る許可を出したのであろうか？

答えは、NOであらう。とんでもない変人集団だ。

無論、彼らも馬鹿ではないので自分たちだけで勝手に作ったりしたりしない。しつかりと、日本の関係各所のお偉方には話しを通して。諭吉さんで。

日本では、大量の諭吉さんを通せば大抵の事には知らん顔をしていくるのである。

他の国であつても、諭吉さんをエリザベス女王に変えたりベンジャミン・フランクリン(米100\$紙幣の肖像)に変えたりすればいいのである。

世界の常識だ。

そんな常識を上手く使い、一般には知られずに作られた空港が、ココである。

その空港に降り立った飛行機から、男達がゾロゾロと出てきた。

常人とは明らかに異にした、雰囲気だけで自らが危険だと伝えてくる男達であった。

「SYAHHA、やあーと付いたぜ！長くて窮屈な空の旅だった！」

先頭で降りて来た男が、その白に近い銀髪のをガリガリ搔きむしりながら言う。

雰囲気で危険さを伝えてくる男達の中において、さらに危険だと判断せざるを得ない風貌をした男だ。

ナイロンの様に堅そうなボサボサの白に近い銀髪、身長は抜きんでて高く、筋肉質な体によく似合う太い腕、色黒、捕食種を思わせる顔、上半身裸、白くてダブダブな作業服の様なズボンを足首に紐で止めて足が絡まらないようにしている。相当混ざっている様で、人種もよく分からない。

何より、瞳孔が開く直前の様な白目を剥いたイッた目に、左の頬から左腕の先にまで渡る鮫のタトウを彫っていた。

町を歩いていたら、半径5M以内には絶対に近づきた

くない男である。

「ほう……機内では全て寝ていた様だが……それでも長く感じるものなのか？」

と、その銀髪の男の後ろ隣に居た男が軽口を言う。

手には黒の皮手袋、上下黒地の迷彩服を着、靴先まで届く漆黒のレザーコートを羽織っている。夜であるのに、普通の人では前が見えなくなるほど黒く塗り潰されたサングラスを掛けていた。まさに、漆黒の男であった。

頭に髪は無い。が、明らかに剃った物とは違う。

頭全体に、火傷の後があった。

「あああ？何か言ったか？」

「……」

銀髪の男が首だけで振り返り、漆黒の男を白目を剥いた目でにらみ付ける。

が、漆黒の男は我関せずという具合で、銀髪の男を見ようとしめない。

「……眩しいな」

サングラスをし、しかも夜にも関わらず、漆黒の男は

眩しそうに眉間に皺をよせて片手でサングラスの顔を覆う。

この男にとっては、夜に遠くで照明が付いているだけでも眩しいと感じられるのだ。

銀髪の男の事は、明らかに無視されていた。

「ケツ、嫌なら割り貫いちまえよ！」

盛大に唾と毒舌を吐き、銀髪の男は漆黒の男をしばらくにらみ付ける。『いつかぶつ殺してやる』という感情がありありと伝わってきた。

「……」

漆黒の男は黙って肩を竦める。

気分を害した銀髪の男は、漆黒の男よりさらに後ろの男に声を掛けた。

この男二人は、風体や態度から察するに後ろの男共より上の人間である。そして、この銀髪の男は明らかに良い上司とは言えない。

そんな上司が気分を害したときに部下にすること、それは当然八つ当たりを込めた嫌がらせである。

「おい、長旅で女が欲しくなった。今すぐ調達してこい」

ちよつとした事、とでも言うように銀髪の男は言った。言われた部下の方はたまった物では無い。

ここは人里から遠く離れた山奥だ。風俗系の店など当然存在するはずも無いし、その辺で適当に捕まえてくる事も出来ない。何せ、ここに居るのは組織の人間のみ、つまりむさ苦しい男達ばかりだ。

「どうした？ さっさと行け！」

部下の男が戸惑っていると、銀髪の男は怒鳴った。

嫌がらせもあるが、半分は本気で言っているようでもある。この男、オツムは大丈夫なのであろうか？

部下の男もそう思ったようだったが、勿論口には出さない。

つとめて、丁寧言う。

「申し訳ありません、ここは人里離れた山奥です。女など居ません」

「……」

銀髪の男が黙ったので、伝わったのかと思えば男はホッする。

その時だった。

部下の男の頭に、銀髪の男の手が乗せられたのである。

「え……？」

ゴキッ、という生々しい音と共に部下の男の首が百八十度回転し、地面に倒れ伏した。

銀髪の男が、部下の男の首をねじ曲げたのである。

「ゴミが、口答えしてんじゃねえよ。無能なら消えちまえ」

そう言って、銀髪の男は狡猾に笑う。

どうも、始めから殺す目的だったらしい。銀髪の男は、たった今絶命した自分の部下を眺めながら気分良く笑い出した。

その光景に、漆黒の男は眉を潜める。

「シャーク……いくらお前でも、こじや女が手に入らない事ぐらい分かってるだろ？」

さりげなく馬鹿にしていたのだが、部下を殺して気分

が良くなっていた銀髪の男。シャークは気付かずに笑いながら言う。

「SYAHAAA！分かってるぜえそんな事、当たり前だろ。ちよつとしたギャグだ！」

そう言って、なおも楽しそうに笑っている。

漆黒の男はさらに眉を潜めた。

『お前はちよつとしたギャグで部下を殺すのか？』とでも言いたげだった。

それが分かったのか分からなかったのか、シャークは笑いを噛みしめながら言う。

「そんな顔すんなよ。別にいいだろ、アウル？ちよつとゴミ掃除しただけだろうが！」

そう叫び、耐えきれなくなったのかまたもシャークは笑い出す。

「SYAHA-SYAHAA!SYAHAAAAA!!!」

「……」

アウル（フクロウ）と言われた男は、またも黙って肩を竦める。それほど気にした様子でも無いようであった。

恐ろしいことに、実はいつもの事なのである。

事実、仲間の一人が死んだと言うのに、後ろにいた部下共は『またか……』と言わんばかりの顔をしていた。

自分に被害が及ぶまでは、他人事なのである。完全に麻痺していた。

部下を殺してすっかり上機嫌になったシャークは、周りを見回して笑いながら言う。

「しっかし、日本つて所は何にもないな！ 周り山しかないぞ！」

そりゃあ、山間部に降りてくれば当たり前であろう。

アウルが、軽く溜息を吐いた。

「だから、この場所を何処だと思ってる？ よもや、首都空港などとは思ってはいまいな？」

アウルが、またはもシャークに軽口を叩く。

「っせーな！ ギャグツつてんだろが！」

二度も出鼻をくじかれて、シャークはまたも激怒する。

「……」

だが、やはりアウルは我関せずである。おかげで、ま

たも部下が死ぬことになった。

二人目の部下の首を捻り、シャークは溜息を付く。

「もう飽きた。俺はもつと暴れてえんだ。おい？ 今度の依頼内容は何なんだよ？」

と、アウルに尋ねる。

アウルは露骨に『そんな事も知らなかったのか？』という顔をしたが、黙って依頼内容の書かれた紙を渡した。通常、すぐに焼き捨てるのが普通なのだが、今回相方がコレだ。こんな事も考えて取っておいたのである。

「あゝ？ こりゃあ、あんまり暴れられそうにねえな」紙を眺めながら、シャークはそう呟く。だが、あまり残念そうには見えない。

「でも、本当にこんなチョロいのなら crown (名を冠する者) の俺らが出張るはずねえもんな。どうせ訳ありだろ、つまり、暴れる可能性が高いつて事だな？」

そう言つて、シャークはニヤリと笑つた。

必要な事だけには頭が働く奴だと思いつながらも、アウルは頷く。

もつとも、必要な事にも頭が働いていなければ幹部に
など成れるはずもない。

「さーと、美術館ミュージアムは山奥じゃねえんだろ？足は有る
んだらうな？」

そうシャークが言うと共に、上空から大人数を乗せる
大型のヘリが降りてきた。随分とタイミングが良いこと
である。

物凄い風圧だが、一団は誰一人としてビクともしない。

「アレが足の様だな……」

アウルその言葉に、シャークは顰めっ面で答える。

「また、空の旅かよ」

そう言いながらも、シャークは一番にそのヘリに乗り
込んだ。アウルや部下連中も後に続いて乗り込む。

そうして、都心に向かってヘリは飛び立った。道中の
時間、シャークが全て寝て過ごしたのはもはや言うまで
もないだろう。

ちなみに、彼らが所属している組織。それはヘリにデ

カデカと書かれているマークと同じ、地球を意味する言
葉。

『Earth』と言っ。

*

「えー、地球つてーのは、アルファベットの綴りで書
くと『Earth』って書へ」

駅前の大通りに面した場所にデカデカと立っている
ような大きな予備校で、受験の真っ最中である高校三年
生に信じられない程の低レベルな授業が行われていた。
「分かってると思うが、E・A・R・T・Hって書く
からな」

小学生に教えているのかと錯覚してしまう様な教え
方である。綴りから教えている。

そんな馬鹿な授業を繰り返していたのは、鴉だった。
「あー、もう分かったな、じゃあ次はと……」

鴉は教卓に乗せてある英和辞典を適当にパラパラと

めくる。

「おし、じゃあ次はコレにしよ。フクロウつてのは『owl』
つて書くんだ。アウルつて読むからな」

そう言つて、ホワイトボードに『owl』と書いてみせ
た。無茶苦茶である。

信じられないことに、鴉の授業は毎回こんな感じだつ
た。

鴉が適当に英和辞書をめくり、出てきたページの適当
な単語を適当に解説する。という受験には99%以上役
に立たない授業をやっていた。

流石に鴉も始めの方は普通に授業をしようとしたが、
まったく上手くいかないので開き直つた結果である。

無論、そのような投げやりな授業など誰も聞いていな
い。

他の先生方に訴えても何も改善しない(鴉が色々とし
てるから)と生徒達が知つてからは、予備校を辞めるか、
鴉の授業など聞かずに一心不乱に自分で勉強するかだ
あつた。

事実、今も寝てる生徒を覗けば皆一心不乱に教科書を
自分でやっている。鴉の声など完全に聞こえていないか
のようだ。

酷い環境に置かれてもやる気を無くさずに頑張る。真
面目な学生達であつた。

まあ、たまには隅の方で雀卓と雀、パイ持参で堂々と麻
雀を始める奴らもいたが、本当に希有な存在である。

悲壮なぐらいに真面目だな、コイツら。と鴉は思う。
「先生！」

生徒の一人が手を挙げる。後ろの方に座つていた生徒
であつた。

鴉は一端意味のない授業を止め、生徒の所に行く。

「何だ？」

「この、読みが分かりません」

その生徒が指し示す単語を、鴉は読む。

「コイツか、これは Neglect of duties (職務怠慢) つ
て読むんだ」

「分かりました。ありがとうございます」

その生徒は丁寧にお礼を言ったが、読ませた言葉は鴉に對しての痛烈な皮肉であつた。

たまーに、こういう事もある。

鴉にも勿論皮肉と言うことは分かつたが、ビクともしない。

自分が職務怠慢どころか、今すぐ辞めるべき最低な授業をしていることなど重々承知の事であつたからだ。

「先生！」

また、生徒が一人手を挙げた。

「何だ？」

ノートを差し出してくる。また、読みが分からない様であつた。

「resignation (辞職)」

生徒達の遠回しな様でいて、割とストレートな嫌がらせに眉一つ動かさずに答えながら鴉は一人思う。

おぜげが無いからなあ……金をくれるんなら今すぐ辞めたって良いんだけど……ピン札で2・300万位用意してくれば……言えば生徒全員のカンパでその位

集まるんじゃないか？

いつそ言つてしまおうか？と鴉は思う。

「タルイ……」

が、実際に実際鴉の口から出てきた言葉は、そんな言葉であつた。

*

そんなこんな授業後の帰路で、鴉は実に焦っていた。予備校に駄目元で頼んでみた給料の前借りがやっぱり駄目で、財布が大空に羽ばたいて飛んで行きそうな程軽かつたのである。

つまり、空っぽだ。

「あー、やつぱり逃げ帰らずにアンダーソンの後を追うべきだったな」

と、鴉は空に向かって呟く。

「何だかんだであそこ以上の収入が入る所なんてねえからな……」

そんな事を言いながら、鴉は喫茶『無道』に行くべきか行かざるべきか迷っていた。

美術館に突入した日からすでに二日が経過していたが、実は鴉は仲介人である沙羅に何の報告もしていない。無論、沙羅の事であるから既に鴉が失敗した事は分かっているだろう。

だからこそ、鴉は行きたくなかった。

鴉にも体面位はある。流石に今回ばかりは『失敗した。また仕事くれい！』と言うわけにはいかないのである。

しかも、あの沙羅の事だ。ノコノコと行ったら今度は何を言われるか分かったものではない。

また、何をされるかも分かったものではない。

「あー」

そんな風に悩みながら歩いていると、見慣れた後頭部が見えた。

茶髪でモサモサとむやみにポリウムがあり、まるでモップの見える髪がヒヨコヒヨコと動いている。

あの可哀想な特徴がある髪型は間違いない、平賀鉄朗。

通称テツ坊であった。

テツ坊は時々電柱で身を隠しながら、小ぶりだが中々の良いケツを持っている女の子を追っている様である。

若いなあ……と、鴉は思う。

誰が見ても、テツ坊がストーカー行為等規制法（正式名称をストーカー行為等の規制法に関する法律）に違反する行為をしているのは明白だった。パッと見て、ここまで怪しく見える絵ズラも珍しい。

溜息を吐きながら鴉は呟く。

「ストーキングするにしても、もうちよつと上手くやれよ……」

このままではそのうち捕まりそうだったので、鴉は声を掛けた。

「おい、テツ坊。そんな陳腐なやり方じゃ捕まるぞ」

「うっひやああ！」

電柱に隠れながら女の子を観察している所を背後から突然声を掛けられ、テツ坊は悲鳴を上げて跳び上がった。

て一目散に逃げだそうとする。

鴉はその首根っこを掴んで、電柱の脇に無理矢理しやがませた。

「何やってやがる。ここで大声上げてバレたら今までのお前の陳腐な努力が無に帰すぞ?」

「え、ア……鴉の旦那じゃないっすか! 驚かせな……ムグツ」

折角フオローしてやったのに無駄にしようとする馬鹿者の口を、鴉は押さえた。

「バカ、だから大声出したら駄目だろうが」
幸い、目標の女の子にはバレていない様である。

鴉が口を離してやると、テツ坊は不思議そうに尋ねた。
「な、何で大声出したら駄目なんですか?」

「は? いや、それはお前が捕まらない様にする為だが……何? お前捕まりましたかったのか?」

そう鴉が真顔で聞くと、テツ坊はさらに訳が分からな
いという顔をする。

「え? なんで僕が捕まらなきゃならないんですか?」

大丈夫か? コイツ? と鴉は思ったが、律儀に答えてやる。

「そりゃあ、ストーカー行為がバレたら捕まるだろ?」

その鴉の言葉で、テツ坊はやつと状況が飲み込めたら
しい。真っ赤になつて抗議した。

「ち、違いますよ! 僕はストーカーじゃありません!」
そのテツ坊言葉に驚愕したのは鴉だった。

「アレがストーカーじゃなくてなんだというんだ?」
……ははあ、人気がない所まで行ったら押し倒す気だっ

たんだな、レイプは止めとけ。素人にはお勧め出来ん」
過去の、若かりし頃の映像が鴉の脳裏を過ぎった。

馬鹿な事をやったな、と過去の行為を少し反省する。
鴉も、昔は意味もなく若かったのである。

無論、レイプの言葉は鴉の冗談である。が、テツ坊は
非常に焦った様だった。

「誰がレイプなんぞするか! か、彼女は良く行くコンビ
ビニの定員で、かわいいから気になつて、今はコンビ

二のバイトの帰りで、声を掛けようと思って、ちよ、ちよつと声を掛けるタイミングが無くて後をついて行ってただけです！」

その言葉に、鴉は顔を手で覆う。

つまり、テツ坊はコンビニで彼女がバイトが働いていた時から今まで、ずっと付けていたということになる。あの陳腐な尾行でバレていないのが奇跡に近い。

マジで言ってるのかコイツ、それがストーキングだというのに……。

「テツ坊、可哀想だが意識して無くても捕まるものは捕まるぞ。気をつけろ」

軽く首をふると、鴉にしては珍しく非常に優しい言葉でテツ坊を諭した。

テツ坊は耳まで顔を真っ赤にする。

「う、うるさいなあ！別に良いだろ！」

その言葉を聞きながら、コイツは駄目かもしれんなあ……、と勝手に人の将来を心配する。と、鴉は閃いた。

コイツは……儲け話になるかもしれん。

鴉はニヤリと笑いながら言う。

「じゃあテツ坊、俺がお前に話しかけるチャンスを作ってやるよ」

そう言うと、テツ坊はしばらく言葉の意味が分からずにボーっとしているが、突然真剣な顔になって言った。

「ま、マジですか？嘘じゃないでしょうね？」

「あ、ああ……」

急に声を張り上げたテツ坊に鴉の方が驚いたが、食いつきが良い方が鴉はやりやすい。

鴉は簡単に作戦をテツ坊に伝えた。

「つまり、俺がヤンキーっぽく絡むから彼女が困りだしたら、お前助けろ」

随分といい加減な作戦である。古典的にも良いところだ。テツ坊もそれは感じたらしい。ジト目で『大丈夫か？』

という視線を鴉に送ってくる。

「任せろ、確実に成功する」

不敵な顔で鴉はそう言うが、当然鴉には何も根拠など無かった。所詮、他人事である。

だが、他人であるテツ坊には十分効果的な顔だった。

「その代わり、成功したら今までのツケ、全部チャラな。ついでに金も貸せ」

自分で勝手に提案して肝心な所は相手任せの適当な作戦であるのに、鴉は堂々と恥ずかしげもなくそんな事を言つてのける。

誰もが眉を顰める相当横暴な要求であつた。が、

「分かりましたよ」

と、軽くテツ坊は答えた。

実は、テツ坊は年の割に中々稼いでいて、鴉とは比べものにならないほど財布には諭吉が唸っている。

若い頃は、必要以上に金があると金銭感覚が鈍くなるものである。

鴉もそれを見越して金になると踏んだのだ。

「じゃあ、行ってくる」

そう言つてテツ坊に向かつて軽く手を挙げ、鴉は女の子を追いかけた。

*

期待に胸を高鳴らせながら、テツ坊は鴉を見ていた。

テツ坊はまだ二十歳、若い。

やりたい盛りでもあるが、まだ女の子に幻想を抱いている奴も居る年頃だった。

テツ坊もまた、女の子にまだ幻想を抱いている若者であつた。

いつも行くコンビニで彼に笑顔を振りまいてくれるその子に、惚れてしまったのである。

笑顔は、勿論営業スマイルだ。そんな事は、彼にも分かっている。コンビニのマニユアルにしっかりと、『接客は笑顔で』と書かれているのだから知っている。

だが、テツ坊は若い。あらゆる意味で若い。

なにより、女性経験が皆無なのが駄目押しだった。

そんな童貞野郎が、もしかして俺に気が……？などと妄想を抱くのを押しとどめるには、その女の子のその笑顔は眩しすぎた。可憐すぎたのだ。

今、彼の脳内では近い未来起こるであろう出来事がシユミレートされている。

こんな感じだ。

「おうおう、ねえちゃんよ！」

などと、鴉が扮するチンピラが女の子に絡んでいる。

「や……こ、困ります」

女の子が、それに困っている。「困ります」などと言つて大変分かりやすく困っている。

そこに、颯爽と現れるのだ。テツ坊が。

「おい、お前何やつてるんだ。彼女、嫌がつてるじゃないか！」

そう言つて、女の子を庇うようにチンピラ（鴉）の前に立つ。

と、チンピラ（鴉）はそんなテツ坊の気迫に怯んで。

「チッ」

と言つて立ち去る。

「あ、ありがとうございます」

と、女の子は怖くて泣いていたのか、潤んだ瞳でテツ

坊に感謝を告げる。

テツ坊は軽く前髪を払つて。

「いいんですよ、当然の事をしたままでです。お嬢さん」

などと言ひ。感動している女の子と上手く仲良くなつ

て、あわよくばあわよくばあああああ！

というような妄想が、テツ坊の脳内で繰り広げられていた。

テツ坊が近未来の自分の姿（妄想）のあまりの格好良さに感動で打ち震えていると、鴉が女の子に追いついた。

何やら話しかけている。

「お、話しかけた」

テツ坊はそう呟いて、電柱の隅から顔をだして鴉と女の子を覗く。ただ、少し遠すぎて何を話しているかまでは分からなかった。

さあ、困れ、困れ、困れ困れこまれええ……！

そうテツ坊は念じているが、一行に女の子は困った様子を見せない。

いや、それどころか……。

「アレ？何か、楽しそうに話してないか？」

そうなのだ。女の子は困るところか、鴉と楽しそうに喋っている。笑顔だ。

アレ？アレ？アレアレあれえ……？

本当に不思議そうな顔で、テツ坊はその様子を眺めている。

鴉と女の子はひとしきり楽しそうに話すと、連れ立って歩き始めた。

何と、女の子の肩に鴉の手が回されている。

鴉はちよつと振り返って、『スマン』と手刀で謝って女の子と去っていった。

その場には、テツ坊だけが残された。

「え……？」

テツ坊は始め何が起こったのか分からずに呆然としていた。が、しばらくすると状況が飲み込めたのか、まるでお湯を注いで解凍しているかの様に段々と表情を取り戻していく。

そして。

「う、ウアあああああああああああ……」

と、雄叫びを上げるように泣き叫びながら、テツ坊は鴉達とは反対方向へ走って行った。

青春である。若者がまた一人現実を知り、大人の階段を上った瞬間であつた。

その泣き崩れた顔は、見た人が思わず通報するほどであつたという。

ちなみに、この事件はテツ坊にとってトラウマになつた事は言うまでもあるまい。

*

「忌々しい……」

窓も何も付いておらず、明かりが乏しい。

周りには全てコンクリート、しかも使い古されている様でその色合いはまるで監獄の様である。

そんな空気が濁っているような部屋で、部下に負傷し

た左手の包帯を換えさせながら道神ダオシエンは憎々しげに呟いた。

その傷は、アンダーソンにやられた物である。

「土壇場で気付きおつて……あと少しだったというものを！」

道神には珍しく、部下の前で感情をむき出しにして怒鳴る。残った手で、近くにあった机を叩き割った。

治療している部下はそんな道神の様子に不安そうな顔をしたが、ただ黙って包帯を換える。

こういう状態の時は黙っていた方が身の為だと、知っていたからだ。

道神は大きく舌打ちをして、傷を作った時を思い返す。道神が美術館での目標の品を探すのは、思ったより難

航していた。

情報では既に展示されている筈だったのだが、情報が何処かで食い違いを起こしたのか展示スペースに目標の品が展示されていなかったのである。

仕方なく、展示前に保管しておく場所を見つけ、それから探すなど手間が掛かることを道神はしなければならなかった。

そんな風にモタついていた折り、突然アンダーソンが

壁をぶち破つて『道神！貴様、謀つたな！』と言いな

がらやって来たのである。

道神はもう一度欺けないかと試したが、もともと口下手な道神である。鴉の口先に完全に踊らされていたアンダーソンには全く効果がない。

応戦してアンダーソンに一撃くれてやる事は出来たものの、目的の品を持ち帰れなかった。

アンダーソンとの戦闘時に僅かに手を斬られて品を落とすし、しかも、その最悪とも言えるタイミングで騒ぎに気付いた警察共が駆けつけて来たからである。

本国以外で職種が違う奴らを殺したら公にならないわけが無いし、腹が立つほど無意味に真面目な奴らで、道神はすぐさま逃げるしかなかった。

「賄賂も受け取らんとはな……日本の警察とは優秀だ」

そう、道神は忌々しげに呷く。

無論、褒めているのではない。『賄賂を受け取る度胸

もない小心者ども』と言って馬鹿にしているのである。

実際、その通りの奴らであったのだろう。

今回、道神はとにかく運が悪かった。

誰も居ないと思っていた対抗勢力が何故かいて、しかもそれが鴉であり、期待していた弟子は時間稼ぎも出来ずに舞殺されてしまう程の役立たず。本国から増援も望めない。現地で調達した奴は馬鹿みたいに『正義』にこだわる奴で、もう少しの所で裏切り、しかも、しっかりと調査させた筈の情報には間違いがある。

踏んだり蹴ったりであった。

「それに、だ……仕事自体が納得できん」

そう言いながら、道神はこの仕事をする経緯を思い出していた。

*

緊急の幹部集会だった。それも、特殊なだ。

無視したい気持ちに苛まれながらも、道神は大老師ダサエンの寝室に向かう。

の寝室に向かう。

普通の幹部集会は幹部集會室でやるのだが、この集会は大老師の寝室で行われる。

「老碌したなら大人しくしておけば良いものを……」

紅龍会本拠地の、隙間無く紅絨毯が敷かれた廊下を歩きながら道神は溜息を吐いた。

昔は畏怖と尊敬しか抱いた事の無かった人物、大老師を、道心は軽蔑するようになっていた。

紅龍会の大老師は、半年ほど前から病に伏せている。

最近とみに悪くなり、もうまもなく死んでしまうだろうとも医者から言われている。

それは、別に軽蔑には値しない。人が死ぬのは当たり前だ。だが……。

「狂った」

そう、道神は吐き捨てる。

はつきりと、精神異常者の様に狂っているわけでない。だからこそ問題なのである。

はつきりと狂っているワケではないので、精神病院に押込むわけにもいかない。

また、仮にも大教師であるから無茶苦茶な命令でも拒むことも出来ないのである。

そして、する命令がまた酷い。

「無意味に、人を殺そうとする」

そうなのだ。大教師は命じられる側からすれば全く無意味な、というより大教師自信の心の平安の為にしか役に立たない事を命じる様になっていた。

酷い物では、チベット自治区東南部のロツパ族を全員虐殺させたことなどが上げられる。

「しかも、昔その縁の者に罵倒されただけではないか……」

罵倒の代償が、一族の滅びである。狂っているとしか

言えない。

しかも、約2300人の大虐殺である。本国での事であれば、確実に各種メディアにバレていただろう。

紅龍会創設の時から大教師の弟子として組織に居た道神は昔の、部下に慕われ、その強さに鬼神とも呼ばれていた老師を知っていた。だからこそ、余計に腹が立つ。

「昔は我が命を生涯この人の為に役立てようと思うほど素晴らしい人だったのだが、今はなんと醜い心である事か」

そう道神は小さく呟きながら、大教師の寝室の扉を開ける。

扉から出てきたのは、豪華な、全体が朱で彩られた部屋である。

幹部、つまり各老師達は全て揃っていた。大教師のベッドを囲むようにして立っている。

道神を含む全ての老師は、かなりの高齢であった。皆パツ見で老人と呼べる男達だ。

実際、この中で未だに現役なのは道神一人であった。

そんな爺共の中でも一目見ただけで死相が出ていると分かる顔をした老人、大老師に道神は中国流の作法で恭しく頭を下げる。

クオンエン
「道神、遅れながら馳せ参りました」

「うむ……ゲホッ、ゴホッ……では集会を始める」

そう老人がベッドの上で咳き込みながら言い。集会が始まった。と言つても、大老師である老人が発言するだけの集会である。

ひとしきり咳き込んでから、大老師は語り出した。それは、大老師の昔話である。

何と長くて意味のない事を……と思ひながらも、道神も老師達も黙つてきいている。

内容はこういうものである。

昔、十六世紀後半、大老師の先祖は中国皇帝の優秀な臣下であった。皇帝は大老師の先祖に感謝し、感謝の印として特注で作らせた小さな箱時計を送った。

やがて一族は没落したが、その時計は大老師の世代ま

で受け継がれていたのである。

それは、一族にとって榮譽の証だった。

が、第二次世界大戦の折、貧困にあぐねその時計を売り払つてしまったのである。

「アレは……ゴホッ、我が一族の血の榮譽の証だ。私……

……ゴホッゴホッ、自分を証明する誇るべき証が欲しい。取り返して、来て欲しいのだ……ガハッ、ゴホッゴホッ！最後の頼みだ」

大きく咳き込みながら、大老師は言う。

道神を含む老師達は、その言葉を聞いて全員が固まつてしまつていた。顔に、ハッキリと怒りを貼り付けてる者もいる。

昔、この紅龍会がまだ出来て間もない頃、皆の前で大老師は言ったのだ。

『俺には自分を証明する物など何も要らない。お前らこそ、この紅龍会こそ、俺の榮譽の証。俺その者を証明する誇るべき証そのものだ』と。

誇らしげに言ったその言葉に感動し、信じて、道神を

含む老師達はこれまで付いて来た。

が、今の大老師の言葉は、それを完全に裏切る物だったである。

あまりのショックに、呻くように道神が声を上げた。

「榮譽の証とは……我々では無いのですか？自らの誇るべき証とは……あなたが作り上げたこの組織ではないのですか？」

その道神の言葉を皮切りに、他の老師達の間からも数々の批判の声が上がると。

「そうです！何を言っているのですか！」「あの時の言葉は……」「どうか、正気に」「我々を欺いていたと！」

「私は悲しい」

など様々な声上がる。が、

「馬鹿者共が！五月蠅いぞ！そういう問題では無いのだ！過去の感傷など何の、…ゴホッゴホッ…意味も無いわ！大人しく言うとおりにしろ、これは私の『最後の言葉』だぞ……ゴホッ、ゴホッゴホッ！」

と、自分の部下である老師達の悲痛な叫びにただ怒り

で返し、そのまま咳き込みだした。

大老師を真に慕っていたからこそ出た感情を単なる『過去の感傷』程度にまとめられ、道神含む部下達は哑然として声も上げられなかった。

そうして、その場は切り上げられ、後で老師だけで集会を行った。

議論は無論、大老師の『最後の言葉』を聞くかどうかである。

掟では『最後の言葉』は絶対であり、しかも大老師の言葉であった。

しかし、全ての老師が今回の事で大老師を見放していたし、その箱時計は今日本の美術館関係が所有していて、金だけでなんとか出来る物では無かったので議論は白熱した。

結果として、大老師の言うことを聞くことになった。理由としては『どうせ、もう死ぬのだから。本当に最後であろうし聞いてやろう』という結論である。

もう一人として、大老師の存命を望む者は其処にはい

なかつた。

*

「老師」

「……何だ？」

過去に埋没していた道神タオシエンは、部下の呼びかけに対して少し遅れて返事する。

包帯を換えていた部下は、少し前に下がっていた。

「どうぞ」

そう言つて、部下は書類を渡してくる。再度調べる様指示していた美術館の情報だ。今度こそ、正確な物であろう。

受け取りながら、道神はその部下を見て考える。

私は、弟子に慕われている師であるのだろうか？ 実際

は、大老師と大差無いのでは無いか？

「何か？」

道神に見つめられて不思議に思ったのだろう。部下は怪訝そうな顔で道神に尋ねる。

道神は軽く首を振った。

「いや、何でもない。……今度は、間違い無いのだろうか？」

一応、道神は念を押しておく。

「はい、確認しました。正確な情報です」

「そうか……」

「それと、決行日三日後が最善だと思われます」

その部下の言葉に三日後まで大老師は生きているのだろうか？と、道神は思う。

大老師は、今この瞬間に死んでも全く不思議では無いという情報が、本国からは来ていた。

もし、持ち帰る前に大老師が死んでしまえば、道神の苦労は報われない所では無い。いや、今回失つた全ての部下が無駄死にである。

あの毫碌し、狂った爺の為に道化を演じたくはない……いや、始めから道化だとしても、成果ぐらひは上げな

ければ形も付かない。

「分かった。下がっていい」

溜息を付くのをグツと堪えて、部下を下がらせる。

「とにかく三日後だ。三日後になってみなければ何も分からん」

そう言つて、今度こそ道神は溜息を付いた。

*

「憂鬱だ」

繁華街の寂れた一体の喫茶店、つまり喫茶『無道』に向かいながら鴉はそう呻いた。

何故、鴉が行くのを躊躇っていた喫茶『無道』に急に行く気になったのか？

それは昨日の午後11時まで遡る必要があった。

*

テツ坊との一件の女が眠りに付いているベッドの横で、鴉はタバコを吹かしている。

鴉はホテルにいた。まあ、そういうホテルだ。古い言い方をすれば連れ込み宿とも言う。

個人情報を守られる所。お金を求める少女達や、その少女達を求めるおじさん達が暗躍する場所でもある。

そんなホテルの一室で、鴉は非常に後悔していた。

「金銭問題を一気に解決する作戦が……」

そう、溜息と共に漏らす。

テツ坊の期待と純情を見事に砕いてしまった鴉だが、テツ坊に申し入れた時からそういうつもりだったわけでは無い。鴉は女に困る様な男では無いし、それに別に彼女などおらずとも玄人の女で十分満足する男だ。むしろ、玄人の方を好む。

だが、金には殆ど常に困っている。浪費癖があるからである。

それ故、わざわざ儲けるチャンスを潰して女を取る様な男では決していない。だが、結果としてそうなってしまう

った。

それには理由がある。

テツ坊の話しで純情そうだと踏んでいた鴉は、チンピラのナンパ風に声を掛けたのである。

だが、向こうは嫌がるどころか、むしろ引くほど鴉より積極的だった。

そんな相手を突き放す事は、鴉も男であったのでちよつと無理であったのだ。実は、軽くフェミニストなのである。

「そりやあ、なあ……あんな風にあからさまに誘われたんじや、断れねえよ」

立ち話をした時に相手に言われた誘いの言葉を思い出し、鴉は首を振る。

「口にも出せん……」

テツ坊が青年故の青い妄想を抱いていた相手は、顔が良ければ誰でもいい尻軽のアバズレだった。つまり、テツ坊の容姿は彼女には箸にも棒にもかからないということであろう。

「運が悪いわ……」

結局やることはやってしまったている癖に、自分は運が悪いと鴉は嘆く。

そんな時だった。

突然、ベッド脇にある電話が鳴ったのだ。

こんな時間に……フロントから電話？

何やら嫌な予感がしたが、鴉は女が起きる前にそれを取る。

「あー、もしもし」

「お楽しみの様ね、鴉」

鴉は驚愕した。

フロントでは無かった。その聞き慣れた声は……。

「沙羅……お前、どうやってこの場所が分かった？」

鴉の背筋に、冷たい物が走る。電話してきた相手は、無道沙羅であった。

ココはラブホテルだぞ？場所が分かったとしても、直接電話なんか出来るのか？

「蛇の道は蛇っていうでしょ？簡単だわ」

そう事もなげに言つて、沙羅は受話器の向こうで嘲笑する。

そういう問題か？恐ろしい小娘だ。

鴉は無道沙羅という人間の恐ろしさを再確認した。只者ではない。

きつと、沙羅には全ての情報が筒抜けなのであろう。

「で、何の様な？」

何やら薄ら寒い物を鴉は全身に感じたが、色々面倒になつてその辺りは無視して尋ねる。

と、低い怒声が返つてきた。

「何の様？へえ……何の様？ご挨拶ね、何の様と来るのね……ふくん。仕事を放棄しておいてその態度、偉くなつたわね」

その声色だけで、鴉は自分が殺されるのではないかと危惧した。

背後をチラリと確認しながら言う。

「スマン、失言だった。あと、連絡を全くしなかつたのも謝罪する」

「謝罪？ハッ、謝罪の言葉でどうにかなるとでも思っているの？中々面白いジョークね、傑作だわ」

そう言つて、クツクツと受話器の向こうで笑っている。

ヤバイ……コレは本当にヤバイ。

鴉は真剣に自分の身を案じた。入り口のドアの向こうの気配も察知しようと警戒する。

既に、刺客が送られているかもしれない。

「まあ、その辺の話は店ではあげるとにかく、明日店に来なさい」

沙羅はそう言い残し、唐突に電話を切つた。

ブーツ、ブーツ、という電話の音が、ホテルの部屋に不気味に鳴り響いていた。

*

というような出来事があったのだ。

喫茶『無道』に行けば、沙羅に何をされるか分かつたものでは無い。だが、

「逃げて、所在がバレるなら無意味だ……」

そうなのだ。例え鴉が逃げたとしても、ラブホテルに居ることまで調べてしまう様な搜索スキルを持つている沙羅相手にしても無意味なのである。

沙羅の怒りに油を注ぐだけだ。

それならば今沙羅の所に行き、何とか活路を見出す方が得策であろうと鴉は考えたのだ。

「だが、憂鬱だ……」

もう一度、鴉はそう呟く。

確かにコレしか方法は無かった……だが、すでに俺は袋小路に入っているとも考えられる。

そんな事を考えていると、すでに鴉は喫茶『無道』に付いていた。

「仕方が無いか」

割り切って、鴉は入り口を開ける。虎穴に入らずんば虎児を得ずという奴であろう。

例のカーラントというレトロな音と共に、レトロな店内が姿を現した。つまり、古い。

「……」

いつもなら、鴉と気付く前にとろける様な笑顔と「いらっしやい」という愛想の良い声があるのだが、完全に無言で沙羅は鴉を迎えた。

無視してグラスを磨いている。

戦場の様に緊迫した空気が、『無道』の店内を包んでいた。

「よう」

「……」

鴉は果敢にも明るく挨拶をしたが、沙羅は無言で一瞥するだけである。

「おーい、客だぞ、スマイルだろ？スマイル？」

緊迫したムードは鴉にも分かっていたが、軽口を叩く。開き直っていたのだ。

だが、反応は無かった。

その様子を見て、大きく溜息を付きながら鴉はカウンターに座る。

「……話とは？」

と聞くと、唐突に沙羅がTVを付けた。映し出されたNKH（日本協会放送）のキャスターが、こんな事を言っている。

『先日オープンした美術館二階で、ガス爆発がありました。怪我人は居ませんが展示品の被害は甚大で、二階の廊下に展示されていた美術品の殆どが壊れてしまった様です。また、建物自体への被害も甚大で、一階まで突き抜ける大穴や、多くの壁が崩れてしまった模様です。他にも、第三保管庫に保管されていた美術品が床に落ちるなどしていました。警察はガス爆発の原因を欠陥工事の為として……』

と、其処で沙羅はTVの電源を切った。

「……またガス爆発で欠陥工事なんだな、捻りを加えろよ。大体、美術館って火気厳禁じゃなかったか？」

鴉はそう、憎まれ口を叩く。

沙羅はそれには答えず、無言で今まで拭いていたグラスを置いた。

「さて、覚悟は出来てるんでしょうね？」

「……」

鴉は聞こえないふりをしたが、無論効果は無い。

「依頼を無断で放棄してトンズラこいた、その報いを受けるか・く・ご・はー！」

言葉の最後の方は、腹の底から込み上げてくる様な怒気をはらんでいる。沙羅の手を乗せたままのグラスに、ピシリとヒビが入った。

顔の前に火を突きつけられている様な重圧を感じ

プレッシャー

たが、表面ではヘラヘラと笑って鴉は手を挙げる。怯えたら負けなのだ

「何？」

「言い訳いいか？」

その鴉の問いに、沙羅は天使のようなとろける笑顔で鴉に向けて、軽く小首を傾げる。

気味が悪いほど優しく言われた。

「私がそれを許すと思うの？」

「……」

取り付くしまも無い。

鴉は深く溜息を付き、タバコを懐から取り出して吸う。だが、味は分からない。

虚勢を張っているのだ。

「吸うか？」

鴉は沙羅に勧める。沙羅は未成年だが、鴉にはどうでもいい事である。

鴉は、機嫌を取っているつもりであった。

沙羅の様な守銭奴な小娘は、いかにも吸いそうであるというのが鴉の見解なのである。

「馬鹿ね」

しかし、鴉の言葉は沙羅の一笑に伏されてしまった。露骨に人を見下した目を向けてくる。

「きつと脳みそが煙で出来ているのね。そんな金が掛かるばかりで、何の特も無いような物を吸っているなんて」

「……確かに、金は掛かるがな」

「それに、体にも悪いわ」

金が掛かるより体に悪いのがついでの様に沙羅は言ってくる。

しかし、そんな事より鴉は沙羅のその言葉にショックを受けた。

「何言ってるやがる？コイツは体にいいんだぞ？」

本気で鴉は言っている。鴉の理論では、タバコは吸えば吸うほど体に良く、肺ガンになる奴は気合いが足りないだけなのだ。

何処かの誰かと似たような理論である。根拠は勿論無い。

沙羅は呆れを通り越して感心していた。

「凄いわ……貴方の脳みそ、本当に煙で出来ているのね」

そう言っ、目線だけで『こんな馬鹿がいては世も末ね』と語ってくる。

鴉は軽く肩を竦め、呆れた。

所詮コイツも小娘だな、何も分かつちやいない。と言わんばかりである。

「まあ、いい。俺に何させる気だ？」

「解体して臓器売りさばくわ」

間髪入れず、さも当然という顔で沙羅は言つてのけた。

鴉は顔を引き攣らせる。

「お前……」

「……と言いたいところだけど、あんたはそれより使った方が金になるわね」

残念そうにそう言つて、沙羅は一枚の紙を鴉に寄越す。

「……コイツは？」

鴉は、渡された紙を持ち上げながら怪訝そうに尋ねた。

その紙が、例の美術館の見取り図であつたからだ。

「今更いらんだろ？」

「あんたは運が良かったのよ」

その言葉と共に、沙羅は見取り図に記された美術館の

二階の第三保管庫を指さす。

「ここに例の依頼の品がまだあるわ、決行日は二日後の夜ね」

一口で説明した沙羅の言葉に、思わず鴉は吸っていたタバコを口から落としてしまった。沙羅が眉を顰める。

「ちよつと、灰皿にすてなさいよ。カウンターに後が付くでしょ？」

「道神はしくじつたのか？」

沙羅の叱責は無視して鴉は言う。

鴉は驚愕していた。信じられないという顔をする。

道神という老人と鴉は古くからの知り合いである。勿論、昔から商売敵であり犬猿の仲であつたのだが、それだけに腕の良さも知っている。

鴉には、何の邪魔もなく道神が失敗するなど考えられなかつた。

そんな事は知らない沙羅は、涼しい顔で言う。

「どうも、しくじつたみたいよ。邪魔が入つたらしいわ」

その言葉に、鴉は閃いた。脳裏に、キラリと歯を光らせる金髪の白人の映像が浮かぶ。

「アンダーソン、あいつ間に合ったのか……」

そんな呟きを、口から漏らす。

あのタイミングで間に合うとは、道神もノロノロやっていたものである。

「何だ。俺も役に立ってるじゃねえか」

唐突に、鴉が言った。

「は？何言ってるの？」

「いや、俺がアイツを焼き付けたから二回目があるわけ……」

鴉は主張するが、沙羅は怪訝そうな顔をする。

鴉には分かっている事だが、沙羅には鴉が何を言っているのか全く分からないだろう。

ついには、『駄目になったか』という様な哀れそうな顔をしてくる。

説明してやりたい鴉だったが、沙羅が理解するまで説明するのは骨が折れそうであった。

「いや、気にするな。つまり、この間までの仕事を完了すれば良いわけだな」

面倒であったので、沙羅の無言の嘲笑は無視して鴉は話を進める。

この間の仕事を続行するだけなら、多少面倒であるが鴉には許容範囲と言えた。

沙羅なら、本当に臓器を売りさばきかねんからな……。

だが、それだけで終わるほど無道沙羅という女は甘くはなかった。

「一割ね」

「は？」

意味が分からず、鴉が問いかける。間髪入れずに答えが返ってきた。

「あんたの取り分」

「……はあ」

鴉は絶句した。

「一割？9.1って事か！」

「そうよ」

あつけらかんと「当然でしょ？」と沙羅は言う。

「一割って……無いだろ、著作料じゃないんだぞ？」

嘩然としながら鴉が言うと、沙羅はにっこり例の天使の笑みをみせて。

「黙れ」

と言った。どうも、今日は笑顔の大盤振る舞いの様である。用途が最悪ではあるが。

「……」

鴉は反論出来なかった。沙羅の顔に『じゃあ、バラすぞ?』という意志がデカデカと浮かんでいたからである。

まあ、死ぬよりマシか。

鴉はそう自分を納得させた。

沙羅はそれで満足したようで、侮蔑の顔を納めて帳簿を付け始めた。恐ろしいほどの桁の金額が並んでいる。そのくせ、鴉にこう聞く。

「客なんでしょ、何か頼まないの?」

無道沙羅という女は、強欲極まりない女であった。

呆れながらも、鴉は答える。

「コーヒー、セルフサービスじゃ無い奴で」

インスタントであつても、せめて作つてから出して欲

しいという意味で鴉は言う。

「はい」

が、トンツという軽い音と共に出てきたのは……缶コ

ーヒーであつた。

しかも、ぬるい。

「ジョー…… (缶コーヒーメーカー)」

ここまで期待を裏切ってくれると、もう凄いとしか言
いようが無い。

プルタブを開け、黙って飲む。ぬるい缶コーヒーの味
がした。

「そうそう、言い忘れてた。あんただけだとトンズラ
するし、今回は組んで貰うから」

突然、思い出したように沙羅が言う。

「組む?俺が?」

沙羅がそんな真つ当な仲介人みたいな事を言ったの
に、鴉は驚いた。

普通、こういう仕事は単独でやるのは難しい。難しい

依頼であれば、腕がよくても大抵の仲介人は組ませるも

のである。

だが、守銭奴の沙羅は自分の取り分を多くするため、今まで鴉と誰かを組ませた事は無い。

今回は相手に道神ダクセンもいるだけに誰かと組むのは鴉にとつても好ましかった。

が、薄気味悪い物を感じる。

「守銭奴のお前が、大盤振る舞いだな……」

そんな鴉の疑問に、沙羅はニヤリと笑う。

「使い勝手の良い馬鹿を見つけたのよ。そいつへの依

頼料はね……なんと無料よ」

「は？」

鴉は自分が聞いた言葉が信じられなかった。ほぼ例外なく命を掛けることになるこの仕事を、無料でやるなんて鴉には考えられない。

タダ？ あは馬鹿どころか痴呆だぞそいつ……何考えて生きてるんだ？

「腕は良いんだけどね。一人でやらせるには……ちよつと、だからアンタも付けたのよ」

そう沙羅は続ける。

沙羅の事だ、本当はそいつ一人に仕事をさせて儲けを丸々取りたかったはずであろう。

「なるほど、それで二日ほど放置されてたのか俺は……そいつは誰なんだ？」

沙羅は、意地の悪い笑みを見せた。

「あんたの知り合いよ、そろそろ来るわ」

「俺の……知り合い？」

嫌な予感がする。

と、唐突に普段客など来ない喫茶『無道』の入り口のドアが開いた。例の、レトロなカランツという音が響き渡る。

「WOW！ コレは随分と奥ゆかしい shop デス、ワタクシ感動です！」

太陽の逆光で見えなくても、その声とシルエツトで誰か分かった。

この言葉、いや、それ以前にこんなシルエットを作れる奴はヤツしかない……。

【正義・アンダーソン！】

「OH！クロウ！」

またもやハモってしまふ。

そう、其処には、金髪でグラサンでスカジャンで柳生でGパンで草履でベルトに日本の刀を差した白人の男、つまりアンダーソンが立っていた。

「クロウ……無事でしたKa-」

アンダーソンは鴉を認めると、そう叫んで抱擁ハグしてくる。同時に良い打撃音がして、アンダーソンの体が床に転がった。

鴉が、間髪入れずにアンダーソンを殴り飛ばしたのである。

「HAHAHA……相変わらずデスNe、鴉！」

だが、アンダーソンには全くダメージが無いようで、

まるでちよつと躓いて転んだだけかのように軽く立ち上がった。

チツ、このバカ、道神タオシエンに殺されていなかったのか……

……

鴉が侮蔑を込めて言う。

「俺に抱きついてくる男は殺し合いの相手だって、昔言わなかったか？」

「Fum、そう言えばそうだった様な気がします。

Sorry-」

服を軽く叩きつつ、軽やかな笑顔を見せてアンダーソンはキラリと齒を光らせた。

その姿を見て、鴉は深く溜息を付いた。

戦闘時でもアンダーソンの脳みそは飛んでいるが、実は普段はもつと飛んでいる。

仕事の時以外はコイツの相手はしたくないので、鴉は

「HAHAHA」と笑うアンダーソンを無視して沙羅の方

に向き直った。

「よりにもよつて、コイツかよ……？」

「そう？天才で有名だし、オツムの方もバカの様だから使い勝手はいいのよ？」

しれつ、と沙羅は言ってくる。

いくら相手がアンダーソンだとはいえ、本人の目の前にしてよく言えるなこの女も……。

「どうやって知り合つたんだ？」

「別に私は何にもしてないわ、向こうからココを調べてやって来たのよ。あんたを探しに来たみたいよ？」

そう沙羅は言う。

そこでアンダーソンが割つて入つた。

「その通り De ス。私はクロウを探しに来たんです！」

「なんで俺を探しに来やがった？」

迷惑だ。と言わんばかりに鴉は言う。いや、実際迷惑極まらない。

「無論、安否の確認と謝罪です！」

「結構だ、返れ。ただし、金なら置いていけ」

間髪入れずに鴉は言う。

一応金なら置いていけと鴉は言うが、アンダーソンに限って金で謝罪をしに来たりはしないだろう。そもそも仕事の出来事で謝罪などという事はアンダーソンしか考えない。

「Oh……、そう言わずに give させてくだ Sa イー」

そう言つて、アンダーソンはスカジャンの懐から大きな包みを取り出した。一体、スカジャンの懐の何処にそんな物が収納出来るスペースがあつたのであろうか？

「ドラ……！」

沙羅が危険な事を口走りそうになり、鴉が身振りで止める。

そういう鴉も、あの世界でも有名な青い狸を連想してしまったのは想像にかたくない。

「わが故郷、テキサスの名物 De ス！」

そんな鴉達の様子を知つてしらすか、アンダーソンは鼻歌交じりでその包みをカンターの上に置くと、中身を取り出した。

中には観光地で売っているお菓子の菓子箱の様な箱が入っており、大きく『テキサス名物』と日本語の書体で書いてあった。

「Open--」

いや、それは正しく菓子箱であった。

アンダーソンの掛け声と共に開けられた箱の中には、日本の観光名所でもよく売ってあるものが入っていた。

もなか
「最中だ……」

「そう！テキサス名物 MONAKA です！」

コレ……本当にテキサス名物か？日本のどっかの地方がギャグで作ったんじゃないのか？

鴉がそう訝しんでいると、沙羅がその最中に手を出した。

そして、鴉にも投げて寄越す。

「コーヒーにも合うんじゃない？」

実は甘い物に目がない沙羅はそう言って、その最中を口に入れる。

「ササ、クロウも eat してくだサーイ！テキサス産まれの生粋の江戸っ子である私の舌に miss はありませ
ン YO--」

テキサス産生まれなら生粋の江戸っ子にはどう足掻いてもなれんぞ、と思いつつも何の変哲も無い最中の様だったので、鴉も言われるままに口に入れる。

と、先に変化が起こったのは沙羅だった。

渋い顔をしたかと思うと、何処かに行ってしまう。続いて、鴉も似たような顔をして店の外へ出て行った。

「c」

わけが分からずアンダーソンがボーツとしていると、二・三分ほどして二人が戻ってきた。

何だか、二人ともやつれた様な顔をしている。

そんな二人に、アンダーソンは喜々として言った。

「Delicious(美味)でしょう？『テキサス名物ステーク館最中』」

『テキサス名物ステーク館最中』。その名前だけでも説明するまでも無いと思われるが、そのステークと館

との不快なハーモニーによって生み出される味は『宇宙が見える』と、ゲテモノ食品研究家達に大絶賛を頂いた代物である。

「HAHAHAH!ー喜んで頂いてヨカッター!」

そう言っ、アンダーソンは笑っている。アンダーソンにはやつれた二人の顔が喜んでいる様に見えるようだ。

沙羅はその顔をゲンナリと見つめ、鴉は殺意を覚えた。

「本当に、コイツと仕事をしろと?」

「……無料だし」

沙羅は金に意地汚いだけに、無料というものに弱いらしい。口をナプキンで拭きながら『我慢しろ』と目で言うってくる。

きつと、アンダーソンにこれは正義の仕事だと焚き付けているのであろう。

沙羅の口は見てきたような嘘をこれでもかというぐ

らい話すので、アンダーソンなどイチコロだった筈だ。溜息を付く。

「いらん、返す」

と言っ、鴉はアンダーソンに『テキサス名物ステーキ館最中』を返した。

「Really? 美味しいのデス ga……」

勿体ないという感じで、アンダーソンはその場でその『テキサス名物ステーキ館最中』を食べ始める。

味覚が腐っているに違いない、と鴉は確信した。

ハムハムと、妙にお行儀良くアンダーソンは『テキサス名物ステーキ館最中』を食べている。

その姿に、沙羅が怪訝そうな顔をした。

「妙に行儀が良いわね……」

「お坊ちゃまだからな」

沙羅が口にした疑問に、鴉は間髪入れずに答える。

「は?冗談?」

沙羅は訝しんだが、鴉は至って真面目に答えた。

「本当だ。こいつは米国アメリカンのとある有名な実業家『CB』の息子だ。ちなみに、金持ちの坊ちゃんらしくハーバード大学を卒業してる」

今は沙羅にそっけなく説明しているが、鴉も向こうで本人からその話を聞いた時には耳を疑ったものである。

「ハーバード？嘘……本当に？」

絶句している沙羅に向かって、鴉は肩を竦めてみせる。アンダーソンが、『テキサス名物ステーキ館最中』を行儀良く食べながら答える。

「YES、私はハーバードから博士号をgiveしました」

「ハーバードを卒業したのに……何でこんな仕事してんのよ？」

絶句した表情で沙羅は尋ねる。もつともと言えばもつともな疑問だった。

「Nu~fu、良い Question デスよ、沙羅サン」

待ってましたと言わんばかりにアンダーソンはそう

言う。例の四次元に繋がっていると思われるスカジャンの懐から一冊の分厚い本を取り出した。

そう、アンダーソンの魂スピリットの聖書、『Great! 柳生十兵衛』である。

「お前、いつもそれ持ってるのか？」

向こうでも散々アンダーソンに見せられた鴉は、げんわりとして尋ねる。

アンダーソンは自信満々に胸を張った。

「無論でス！全二十八巻（連載中）常に携帯していまス。Everyday でスー」

やはり、アンダーソンのスカジャンの懐は四次元に繋がっていると見て間違いないようだ。

そう確信している沙羅と鴉の横で、アンダーソンは話に花を咲かせる。

「知らない沙羅サンに explain（説明）シマスネ！コレは今テキサスで Very popular（大人気）なコミック

『Great! 柳生十兵衛』デス！コレはですな……」

駄目オタクらしく長く、且つ無意味な脱線や補足が多い説明をアンダーソンは約二時間渡って話してくれた。

その二時間の説明をまとめると『現代に降り立った柳生十兵衛が、アメリカの地でテキサス柳生なる剣術を操って何故かアメリカにいる日本の自衛隊（悪と称されている）などと戦闘を繰り広げる』という内容である。設定の開き直り方が、ある意味素晴らしい。

作者はアメリカ人で、部隊はアメリカであるのにも関わらず自衛隊との戦闘はあるのにアメリカ軍との戦闘は一切無いという、突っ込み所が多すぎて何処から突っ込めばいいのかさっぱり分からない漫画である。

で、アンダーソンは言う。

「私はコレに感激して正義Justiceのroadを歩もうと思っ

た)のworkをchoiseしたワケデス」

「は〜」

二時間も説明されたというのに、沙羅には『正義の道

を選ぶ→この仕事』という繋がりが分からないらしい。

実際、鴉も説明された時には分からなかったので教える。

「つまりな、この仕事が一番『Great! 柳生十兵衛』で柳生十兵衛がやってる事に近いとアンダーソンは思ってたわけだよ」

「ああ、なるほど」

それで、沙羅も納得する。

まあ、近いと言えば近いし、遠いと言えばあまりにも遠い。

「YouはUnderstand（理解できましたか）？ちなみ

に、私の名前の正義まことよし・アンダーソンというのもjusticeの道を志してハーバードを卒業した時に、justiceに因んで命名したのデスよ」

「なるほど、それで正義か……」

そこまでは知らなかった鴉が納得していると、沙羅は

別の事で驚いた様だった。

驚愕した顔で言う。

「え？ハーバード卒業後に志したって……今幾つ？何歳の時卒業した？」

「二十四で卒業し、現在二十八デス」

即答されたその答えに、沙羅だけでなく鴉も顔を手で覆った。

お互い示し合わせた様に首を振っている。

普通、鴉達の仕事は使い物に十年は掛かる。しかも、幼少からの訓練を必要とする。

「なるほど、あんた天才バカなのね」

と、一つの単語で二面性を持つ言葉を使って、沙羅は結論を出した。

*

喫茶『無道』を後にして、鴉はアンダーソンと共に爺

の工房へと来ていた。

『Crow』のメンテと、アンダーソンに真つ二つにされてしまった連射用の新しいのがどうしても必要であったからだ。

だが、相変わらず鴉に金は無い。

あの後一応沙羅に依頼料の前借りを頼んでみたのだが、今度は雑巾とバケツを渡されてしまったからである。

だが、爺は言うまでもないし、テツ坊に至ってもあの事件の後である。ツケが出来るとは思えない。

しかし、工房の扉を開ける鴉は余裕の笑みを見せる。秘策があつたのだ。

工房では、爺が一人で酒を飲んでいた。

「相変わらず汚い工房だな」

工房の中に入って、鴉はそんな風に爺に声を掛ける。ギロリと、爺の目が此方を見据えた。相変わらず、ビンから直接酒を飲んでいる。

「何だ？」

「あの連射の奴の新しいのが欲しいんだが」

酒をグビツと飲み、爺は一つゲップをした。赤い顔で鴉を睨む。

「その前に、前回足りなかった分の代金は持つてきたんだらうな？」

「あ——、鴉の旦那！」

爺が言い終えるのに重なって、奥で何やら作業をしていたテツ坊の怒声が響いた。

工具を右手に持ったままズンズンと鴉の方にやってくる。

「よお、テツ坊、丁度良かった。コイツの弾と、メンテよろしく。ツケで」

そう言つて、鴉は『Crow』をヒラヒラさせる。

テツ坊は顔を真っ赤にさせて怒った。

「旦那！一体、どの口でそんな事言つてるんですか！

ふざけるのも大概にしてください！この間はよくも裏切ってくれましたね！」

純情を見事に砕かれてしまったテツ坊は、分かりやすく怒っている。

それに対して、鴉は冷静に答えた。

「大丈夫だ、テツ坊。あれはとんでもない尻軽のアバズレだった。俺が的確に処理した」

……ホテルで。

ホテルは鴉の脳内の思考でしかないのだが、テツ坊はまるでそれを読み取っているかの様に憤慨する。

「あの後は、お楽しみでしたか旦那？良かったですね！今すぐツケ全部返してくださいよ！ほらっ、全部！返せるものならね！」

「何だ？貴様またオケラか？返れ、金稼いでこい」

テツ坊は怒鳴りながら鴉に詰め寄り、爺は呆れて新しい酒を取りに奥に向かう。

が、鴉は二人のそれらの行動を一瞬にして止める言葉を吐いた。

「分かった。払おう」

ピタリと両者の動きが止まる。すぐに爺が怪訝そうな顔をした。

「払うって……貴様、この間の依頼は失敗したんじゃないや

ないのか？」

「よく知ってるな」

そう平然という鴉に、テツ坊はさらに怒りを爆発させる。

「てめえ！じゃあ、払えねえじゃねえか！オオボラぶっこいてんじゃねえよ！」

もう、敬語すら何処かへすつ飛んでいる。

そんなテツ坊の様子を見て、鴉は嘲笑した。

「若いな、テツ坊。俺に金が無いからと言って払えないとは限らないだろう？」

「はあっ！」

テツ坊と爺、二人同時に不思議そうに声を上げる。

そんな二人の様子を鼻で笑いながら、鴉は気分よく声を掛けた。

「アンダーソン、来い」

鴉がその声を掛けると、今まで入り口の外に居たアンダーソンが中へ入ってきた。

「HOー！ココが、クロウが言っていた爺サンの工房な

のでスねーYOUがテツ坊ですか？」

「Nice to meet you」などと言って、アンダーソンはテツ坊と握手を始める。

テツ坊も爺もあつけに取られていたが、鴉はその様子は無視してアンダーソンに声を掛けた。

「アンダーソン。例のヤツ、頼む」

鴉は元からアンダーソンに言い含めていたらしく、アンダーソンはすぐさま反応する。

「OK Justice正義の為ならば仕方ありません、任せてくだサイ！」

そう言って、アンダーソンは例の四次元空間のスカジヤンの懐から、大量の札束を吐き出して手近にあった机の上にドサドサと置いた。

「Justice正義の為、この money は自由にしてください！」

クロウ」

突然出現した札束に唾然としている爺とテツ坊に向

かつて、鴉は言う。

「だ、そうだ。コレで払おう」

自分の金では無い癖に、随分と堂々としたものだった。一瞬何か言い掛けたテツ坊だったが、札束の量をもう一度見直してそれを幾らか驚掴みにすると、鴉の『Crow』を受け取つて奥へ向かう。

爺さんも、同様に札束を驚掴みにして奥へ消えた。連射用の予備でもあるのだろうか。

さつきまでの二人の行動が、まるで嘘のような迅速さだった。

「金は偉大だな」

鴉はしみじみそう思った。アンダーソンに向き直つて言う。

「お前、意外と使えるな」

「NO！意外とは心外デスYO！クロー！」

と、鴉達がそんな事を話していると、奥から声が掛かった。

「旦那、青弾を制限一杯まで撃つたでしょう？このデ

カブツ相当痛んでますよ！」

「あー、スマン。撃つたかもしれん」

「制限までは撃つなって言つてたでしょうが！」

テツ坊の怒りの声に、鴉は抜けた声で答える。

奥から、爺が鴉の連射用の銃を片手に戻つてきた。肩間に皺を寄せている。

「おい、見たが、シリンダーがかなり痛んどる。何発撃つた？」

「目一杯、制限の三発だ」

「本当か？あのむやみに頑丈なデカブツのシリンダーが痛んどるんだぞ？」

鴉は肩を竦めた。『嘘付いても仕方ないだろ？』と態度で表す。

爺は舌打ちした。

「いくら頑丈とはいえ、やはりあの弾をハンドガンで撃つには無理があるか……」

「だろ？な、撃つたびに肩が抜ける思いだよ」

そう鴉が答えるが、爺は皮肉つて笑つた。

「お前が頼むから、撃てるようにしとるんだぞ？自業自得だ」

「……違いねえ」

そう、鴉と爺は話す。

『Crow』で使われている青リムの弾は、元々『Crow』の規格に合っていない。というか、弾の内部に信管が入っているのである。ハンドガンに使っていい様な弾ではない。鴉が頼むので爺が『Crow』に合うように無理矢理作ったのである。

その為、頑丈さが取柄の『Crow』であっても制限弾数があった。三発だ。

なら三発撃つて良いのかというと、そうではない。三発なら壊れないだろうという目安だ。

その為、制限弾数の三発を撃ちきるのは好ましくなかった。

「その『Crow』というGunは、爺サンが作ったの
デスKa~」

唐突に、アンダーソンが鴉達の話に割って入った。爺

が、ゆっくりと首を振る。

「無茶言うな、こんな規格外の代物作れん」

そう言つて、爺は吐き捨てる様に続ける。

「気になつて調べてみても、使っている金属の繋ぎにチタンが混じつとる事ぐらいしか分からん。繋ぎにチタンだぞ？有り得ん。分かるのは、恐ろしく頑丈なハンドガンつて事だけだ」

アンダーソンは「そうですか」と呟いて鴉の方を見た。鴉も首を竦める。

「貰い物だ。俺にも出所や材料はさっぱり。気になるのか？」

答えながら『Crow』鴉の顔が、どこか寂しげに霞んだ。が、アンダーソンはそれには気付かない。

「ええ、なにせこの『Justice 正宗』の刃を受け止めましたからね。この名刀『Justice 正宗』、使う者が使えば、例え鍛えた鉄であってもバターよろしく切り分けますよ」

そう、『Justice 正宗』の艶やかな刃を見せながら晴れ

やかに答えるアンダーソンの顔に、鴉はげんなりした顔を向けた。

「刀で鍛えた鉄をバターみたいに切ったらおかしいだろう？」

「そーいや俺も気になってたんだが、その刀誰が打った物なんだ？テキサスの鍛冶屋か？」

テキサスに鍛冶屋があるかどうかは知らないが、打った奴は相当腕が良い。

そう聞くと、アンダーソンはキョトンとした顔で答えた。

「私デス ga:c」

「何———!!!?」

思わず、鴉は絶叫する。爺も絶句していた。

「ど、どう見ても名工の業物クラス……いや、それ以上の輝きを放つてるぞー！」

「お、お前……」

もう、声も出ないとはこの事である。職を間違ったとしか思えない。

爺がさらに質問する。

「鋼じゃないような気がするが……材質は何だ？」

「庭に転がっていた stone の中であつた物デス。幼少の頃、sky から降つてきまシタ」

「……」

鴉と爺が黙り込む。つまり、アンダーソンが持っている刀とは、隕石の中に入っていた宇宙原産の金属を使っているという事だ。超金属かもしれない。

「道理でダングステン弾でもビクともしないわけだ……鍛冶の技術は？」

「Comic の見様見真似デス」

鴉は深く溜息を吐く。爺は軽く首を振ると何処かに行つてしまった。

分かつていた……こんな変態だつて分かつてはいたんだが……。

鴉は、アンダーソンについて深く考える事を止める事にした。身が持たないという事に、今さながら気がついたからだつた。

— Chapters 『洛陽』



午後、十一時半を回った。日は完全に落ち、郊外にある美術館周辺では外灯以外の光源は無く、様々な場所に目視出来ない闇がある。

その闇の中の一つで、二人の男が美術館を見ていた。

「クロウ、そろそろベスト time デス YO~」

「ああ……」

アンダーソンの声に答えながら、例の騒ぎの後で警備員がやたらと増えた美術館の正面玄関を眺めつつ鴉は考える。

まず正面からは無い。前回は庭にある林側の窓からシヨートカットで二階まで入ったが、今回も同じようにはいかないだろう。それにまず、沙羅からの情報によると

あの場所は窓ではなくなっている。

「流石に、壁をブチ抜いて行く気力はない……」

建設は遅かった癖に、修理は異常なほど早かった観光庁に苛立ちを覚えつつ鴉は考える。

見取り図によると、裏に職員用の入り口がある。

多分、ここならあまり警備はいない筈だ。しかし……。

「クロウ、行きます YO~」

「ああ……」

深く考え込んでいたので、鴉はアンダーソンの言葉に生返事をして聞き流す。

多分、ココがベストだが……道神達ダオシケンも使ってそうな

気がする。いや、間違いない使っているだろうな……しかし、他に良い場所もない……なんで公共施設なのに緊急の避難口がほとんど無いんだ？……ん？今、アンダーソンが行くとか言っただけか？

そこまで思考してからアンダーソンの言葉に気がつき、鴉は顔を上げる。

其処には、信じられない光景が広がっていた。

「私は、この美術館ミュージアムに入った賊を extermination (退

治) しに来マシター road open (道を空ける) ー！」

と、アンダーソンが正面玄関の警備員に対して言っている。

ココまでアホだったとは……。

鴉は頭を抱えた。

「何だ貴様！」「コイツ、頭がおかしいんじゃないか！」

「早く警察を呼べ！」

という様な言葉が、警備員達の間で飛び交っている。

無論、道を譲ろうとする筈が無い。

だが、アンダーソンはその様な警備員達の言葉など意

にも介さず、正面玄関を通ろうとした。

当然、警備員達は取り押さえようとする。

「取り押さえろ！」

一人の警備員が掴み掛かると、それを弾き飛ばしてア

ンダーソンは叫んだ。

「YOU-Justice正義である私の歩みを block (遮る) す

るのデス ka? ならば即ち、あなたがたは悪デス！悪党

共(デス!!!)

そう言ってアンダーソンは『Justice 正宗』の刃を引き抜き、振り回し始めた。

「こ、こいつ、日本刀を所持してるぞ！構わん、警戒棒(警備員の警棒)を使え！誰か、消火器も持って来い！

警察は呼んだの……グワアッ！」

警備員の一人が切り伏せられる。峰打ちなので正確に

は叩き伏せるだが、アンダーソンの鮮やかさは、峰打ちであつても既に切り伏せるの領域に入っていた。

次々と切り伏せられる警備員を遠巻きに眺めながら、

鴉は溜息を付く。

何故コイツといるとこも溜息が多いのか……。

「まあ、峰打ちだしな」

……殺傷力はあるかもしれないが。

まだ日本語がまともじゃないからそんなには切れて

はいないし大丈夫だろう、と自分に納得させて鴉は裏の職員用入り口に急ぐ。

「Justice!!正義の為にージャ、ジャ、ジャ、Justice

!!!

と言うわけの分からない叫びが、美術館正面付近にこだましていた。

*

アンダーソンが騒ぎを起こしている正面玄関とは真反対の場所に、鴉の目指す職員用で入り口がある。

前は潜伏していた林を警備員に見つかからない用に突っ切って、美術館の裏手に回りこんだ。

「おかしい……」

鴉は呟く。

裏手には、警備の姿が見えなかったのだ。

裏手に警備が少ないのはまだ分かるが、いくらなんでも少なすぎる。いや、まったく居ない。

「こりや、間違いないな」

呟きながら、目標の扉の付近まで移動していく。目標の扉を見ると、傍に警備員が4人ほど倒れている。

鴉は舌打ちした。

「やっぱ、道神達もここを使ったか」
タカシエン

だからこそ、警備員が既に倒れているのである。

「となると、急がないとマズいな」

そう呟いて、扉に向かって走る。と、途中で鴉は何かに軽く躓いた。

「!!」

鴉が見たもの、倒れていた警備員に隠される様に倒れていたソレは、紅龍会の下っ端の……。

半分に切断された胴体、死体だった。

死後あまり時間がたっていないようで、未だに血が流れ続けている。

三人分ほどある。恐らく、見張りとして道神が置いたのだろう。

その全てがまるでひどく巨大なノコギリで切られた様な、そんな切断面を残して胴体から半分にされていた。

「……コイツは」

鴉は驚く。

紅龍会の下つ端の死体があつた事にはない。その筋の奴らは一般人は殺さない様に努めるが、同業者が相手ならほぼ間違いなく殺すからである。

問題は其処ではない。問題となるのは紅龍会以外の勢力がいるという事、そして……。

その何処か現実離れた切断面に、鴉は見覚えがあつたと言う事だ。

「クソツ、マジか」

そう吐き捨てて、職員専用出入り口に向かう。

アンダーソンを置いてきてしまった事を、鴉は酷く後悔した。

*

「クソがツ、つまらねえ！」

色黒で銀髪、常に瞳孔が開いたようなイッた目をした男、シャークがそう盛大に毒づく。

手には、まるで片刃のノコギリをそのまま大きくし、それをさらに凶悪にした様な大刀が握られていた。

非常に苛立つている。今にも部下に当り散らさなければかりだ。

というより、シャークは部下に当り散らしていないのが奇跡の様な精神状態だった。

シャークが当り散らすと死人が出るだけに、かなり危険な状態である。

隣に居た坊主で漆黒を纏った男、常に漆黒のサンングラスをしているアウルはその様子を冷やかに見つめる。

「……シャーク、依頼主が複数依頼していたんだ。引

ける我々が引くのは……当然だろう？」

そう、至って冷やかな声でアウルは告げた。

彼らは撤退している。依頼主からの依頼が複数依頼だ

ダブルフツキンゲ

ったからだ。ついさつき、美術館内で道神達と情報交換した時に気が付いたのである。

複数依頼とは、この業界でやってはいけない事の五本

指に入る。

もし依頼主が複数依頼していた場合、速やかに依頼を

放棄し、場合によっては依頼主への報復をする。それが

この業界の慣例だった。

今回の場合、依頼主が紅龍会の大老師であったため道神達は引けず、彼らは撤退する事になったのである。報復も無しだ。

それが、シャークには気に入らなかった。

隣で煮えたぎっているシャークを小馬鹿にした様なアウルの語調は、シャークの怒りをさらに加速させる。

「うるっせえんだよ！ハゲ！黙りやがれ！」

「……」

漆黒のサングラス越しでも分かる冷やかな目線を送りながら、アウルは肩を竦める。

その行動も、視線も、何もかもシャークには気に入らなかった。

「俺は暴りたいんだよ溜まってんだ！発散先がないからせめて部下に当たらない様に大声張り上げてんだろうが！分かったら黙れ！」

「喋っておらんが？」

間髪入れずに、アウルが揚げ足を取る。その辺が、シャークの限界だった。

元々短気なシャークだ。切れたら速い。

手にしたノコギリをイメージさせる大刀を、片手で横になぎ払った。

「ギヤアツ！」

という複数の悲鳴が上がって、アウルの付近にいた部下達の胴体が真っ二つになる。

「短気は良くない……カルシウムを取りたまえ」

が、アウルは涼しい顔をして、血飛沫が舞っているさつきと同じ場所に立っていた。

シャークが大刀を振る直前、シャークの大刀をギリギリ避けられる程度に跳んだのだ。

しかも、周りの部下からの返り血も付いていない。

纏った漆黒のレザーコートは、未だに漆黒のままである。

その涼しい様子に、シャークは本当に切れたらしい。ただでさえ危険な目をさらに危険な領域までギラつかせて、アウルを睨みつける。

「デメエ、マジで相手してやろうかアアアアアアアアアアアア」

そんな周りの部下全てを疎みあがらせたシャークの叫びを一身に浴びても、尚涼しい様子をアウルは崩さない。

軽く肩を疎めてから、至って冷静に言う。

「困るね……私は元々白兵戦は好まないからこの状況

は不利だ。しかも、もう用は無いにしてもここは一応戦場だ。そんな馬鹿な事はしたくない。それに、そんな暇も無いようだ……」

本来無口なアウルにしては妙に饒舌に話し、自分達が出て行こうとしていた職員専用出入り口を指差した。

シャークもそちらを見る。

なんと、其処には口元を引きつらせた鴉が立っていたのである。

「相変わらずなご様子で」

と、鴉は言う。

シャークは一瞬呆としていたが、鴉を認めて一気に気分を良くした。喜々として言う。

「おお、クロウ！クロウじゃねえか！いや、久しぶりだなあオイ！元氣してたか？」

「ああ、おかげさんでな、そっちはどうだ？」

親しげなシャークに鴉もにこやかに対応する。

シャークはノコギリの様な大刀を下ろし、親しげに片手を上げて鴉に近寄っていく。

そんなシャークに、鴉もフレンドリーに両手を広げて迎える。

二人とも笑っている。まるで旧友の再会のようだ。

「いあやあ、ほんと、クロウが元氣そうで何より。てめえが『Earth』を辞めてから俺は寂しくて寂しくて、大変だったぜ。俺の調子か？俺はもう……」

その瞬間、イツた目がアウルに向けたものに変わった。シャークの片腕が、大刀を持っているとはとても思えない速度で動く。

「元氣ハツラツだツ」

たたき込む様に繰り出された一撃に、鴉は職員用入り口と一緒に飲み込まれてしまった。

かの様に見えた。が、

「脳みそ足んねえのも相変わらずな様だな！鮫！」

という叫び声と同時に、鴉が『Crow』のグリップをシャークの顔面に叩き付けた。

鴉はシャークに切られる直前に、先ほどのアウルのように跳び上がってシャークの頭上に移動していたのであ

る。

殴りつけた反動を上手く使って、鴉はシャークの後方に着地する。

意外と知られていなかったりするが、銃のグリップ部分はハンマー並みに堅い。それで相手を殴りつけるだけで、殺傷力は十分と言える。

だが、その痛烈な一撃を受けたというのに、シャークは平然としていた。

ちよつと赤くなつた程度の顔面を搔きながら、シャークはのんびり鴉に聞く。

「何だ？虫でも取つてくれたのか？昔と変わらず親切だな」

鴉も平然と言う。

「挨拶がわりにな、お前と頭の中がよく似たハエちゃんだったよ。親切だろ？」

平然としているシャークに大して驚いた様子もなく、鴉はそう言つて笑う。

シャークも同じように笑つた。

鴉の笑い、シャークの『SYHAHHAAAAA』という笑いが狂ったようにこだまする。

二人は知り合いだつた。というより、昔は鴉も『Barth』の構成員の一人だつたのだ。

その当時から、この二人は犬猿の仲であつた。ケンカするほど仲が良いとはよく言うが、無論この二人のはそんな物ではない。もつと、殺伐としたものだ。

とある理由で鴉は『Barth』を抜けたのだが、それ以来初めての、久方ぶりの再会だつた。

シャークと鴉が笑いながら言い合う。

「SYAHAA、でも、挨拶の割には何かおかしな単語混ざつてなかつたか？」

「何だ？ 気のせいじゃないのか！」

「そうだなあ、やっぱ俺の気のせいかも知れないな

あー！」

「だろ！ 鮫！」

「ソイツだろうが！」

ブンツと風を切る音がして、怒声と共にシャークの大

刀が舞う。

それは直前まで鴉がいた場所を通過し、近くにあつた柱を粉々に粉砕した。

鴉といえば、自分の後方にいたシャーク達の部下を飛び越えてその向こう側にいる。

「どうした？ 鮫、届いてないぞ？」

鴉が陽気に言うその言葉で、よりシャークは頭に血が上る。

「その、名で！ 俺を呼ぶなつってんだろが！」

鴉に向かつて、恐ろしい速度で走り込んでくる。大刀など抱えていない様な速度だ。

シャークの走り込む先には、自分を把握しきれずに動けなかつた部下達が壁を作っている。

それを見て、シャークは舌打ちした。

「邪魔だ、ゴミ共がッ」

低い怒声と共に、鴉もろとも切断しようとして部下達を大刀が襲う。

肝心の鴉には触れもしなかつたが、部下は残らず上半

アンダーソンはシャークの方に向き直る。

「とにかく！貴様のような人間の風上にも置けん

正義
Justiceのジャの字に触れただけで空中分解してしまう

様な悪党は……Justice!やう、正義の名の下に貴様を叩

つ切 Ru!!!

カッとサングラスを光らせてアンダーソンは叫ぶ。切
れても決め台詞の辺りだけは英語のままなのだ。

アンダーソンは、『Justice 正宗』の刃先がそのまま伸
ばせばシャークの喉元を貫く形になる構えを取った。

『ぶっ殺してやる！掛かって来い！』の意味である。

そんなアンダーソンの様子を冷めた目で眺めていた
シャークは、唐突にペツと唾を吐いた。

気怠そうに背筋を伸ばした後、目が急激に危険な色を
帯びる。

「そんなに怒りやがって、ただゴミ掃除しただけだ
ろ？楽しく暴れてたのに……どうしてくれる？テメエ
を細切れにした程度じゃすまねえぜ!!!」

「その不謹慎な言葉！二度とは吐けないようにしてや
るわ、鮫面!!!」

シャークの部下を冒涇した言葉も、アンダーソンの鮫
面という言葉も、両者を完全に怒らせるには十分な起爆
剤だった。

そうして、二人の馬鹿の戦いが始まった。

*

その様子を横目で眺めながら、鴉は思う。

「何か、良い具合になったな……」

置いてきてしまったのは失敗だと思ったが、アンダー
ソンが予想より断然早いナイスなタイミングで到着し
てくれたのは鴉にとって行幸だった。

鴉がコイツらの相手をしていたら道神タオシエンに追いつけな

くなるのは明白だったのである。

とりあえず鮫を怒らせて、それで隙を見て一気に逃げ

る。というのが鴉の立てた作戦だった。

成功率は、実は低い。だからアンダーソンが来てくれたのは本当に行幸であった。

「さて、その幸運を逃さぬように、コイツらは放つておいて俺は行きませうかな」

そう呟いて、鴉は戦っているアンダーソン達を尻目の上の階へ向かおうとする。

すると、鴉の前に一人の男が立った。

頭が禿げていて、漆黒のレザーコートを着た男である。

アウルと呼ばれていた。

アンダーソンの様にサングラスを掛けているが、薄く目が見えるアンダーソンのと違って、前が見えるのかと心配になるほど深い黒に覆われたサングラスだった。

ああ、コイツを忘れていたな……。

「何だ？止める気か？」

そう鴉が言うのと、アウルという男は心外そうに肩を竦めてみせる。

ダブルアップキング

「まさか、複数依頼の時にアホみたいに戦うシヤーク彼とは

違いますよ」

そう言つて、薄く笑つて続ける。

「まあ、私の今の位置に昔いたつて人が、一体どんな奴なのか気になったつてとこです」

「なるほどね……」

鴉は曖昧に返事をしながら思う。なるほど、だからアウル（フクロウ）ね。正確には俺の後釜じゃあないんだけどな、その位置。

アウルはさらに続ける。

「道神ならまだ逃げてはいないはずですよ。保管庫で時計を探してる最中の筈です」

鴉は驚いた。続いて、軽薄な笑顔を見せる。

「俺の後釜だから近親感でも沸いたのか？」

「ハッハ、その意見は面白い。違います。私はあの爺さんが嫌いなだけですよ」

下を向いて笑いながらアウルは言う。

「なるほど、そいつは分かりやすい」

そう言つて、鴉も軽く笑う。

何か礼をしてやってもいいな……。なんとなく、鴉はそう思った。

戦っているアンダーソンとシャークの方に向けて顎をしゃくる。

「加勢してやった方が良い、アイツは化け物の一種だからな」

鴉も、相当酷い奴であった。

「ほお……」

アウルはシャークの方を向き、言う。

「ソイツがお前の手に余るようなら、言ってくれ」

「うっせえ、黙ってるハゲが！」

間髪入れずに、一瞬で拒否されてしまっている。アウルは笑った。

「ま、こんな所です。これで加勢なんぞ出来ないでしょう？」

「違いねえ」

鴉も、答えて笑い。その場を後にする。

ふん、アイツがアレの後釜か……。内部事情では俺の後釜になってんのね。やれやれ、とんでもなくいい好かねえ野郎だ。

そんな事を考えながら、鴉は道神がいるであろう第三保管庫に向かった。

*

激しい破壊音がして、美術館を支えている柱の一つが音を立って粉碎された。

美術館一階の床、柱、生き残っていた部下、貴重な美術品などを盛大に破壊しながら馬鹿二人が戦っている。

「カァアアッ!!!」

と、切れたとき独特の叫びを上げながらアンダーソンが『Justice 正宗』を振るう。

一筋の閃光が、シャークの喉元に向かって走る。

それを、シャークは自らの大刀で受け流す様にして弾

いた。

見かけとは裏腹な、柔軟な動きである。

「ぬっ！」

「調子にのってんじやねえぞ、金髪野郎が！」

シャークは『Justice 正宗』を弾いて後ろに行った大刀を、まるでサイドスローの投手の様な動きでアンダーソンにたたき込む。

一見無駄が多い様な動作だが、『Justice 正宗』を弾いた反動がまだある状態から腕力で無理矢理戻したのだ。常人であれば腱が千切れている。その分、奇襲性があった。

「洒落臭いわ！」

しかし、アンダーソンも並の男ではない。

戻ってきた巨大なノコギリ状の大刀を、質量としては三分の一にも満たない、『Justice 正宗』で負けじとはじき返した。

「ゲッ！」

それにはシャークも多少驚いた様である。顔を引き攣

らせた。

弾かれて体勢を崩したように見えるシャークの位置は、アンダーソンの必殺の間合いである。

仕留めるッ！

心の中で絶叫し、息を止めて踏み込む。

踏み込みは息を殺し、放つときは気（声）を放つ

アンダーソンが漫画を元に我流で剣法の鍛錬をしてきたとき、このやり方が一番効率よく踏み込みと抜きの動作を行えると知ったのだ。実際、これは正統な剣術とも相通ずる。

が、踏み込みの動作を行った時、シャークの顔が焦りとは違う引き攣りを持っているのにアンダーソンは気がついた。

抜きに移ろうとしていた動きを瞬時に止め、替わりにシャークの腕の隙間に飛び込む。

「チッ、外したか」

直後、アンダーソンが抜きの体勢に入ろうとしていた位置に大刀が振り下ろされた。

床が粉碎され、残骸が舞う。

「ちよこまか動きやがる」

シャークが舌打ちする。

アンダーソンに大刀を弾かれて一瞬無防備になったように見えたシャークであったが、弾かれて背後に回った大刀を左腕に持ち替え、そのまま大刀に残った推進力を上手く使い左側から振り下ろしたのであった。

腕力だけでなく、柔軟性もなければ出来ない動きだ。

伊達や酔狂で、この業界でトップツイーを担う組織の重職をしているわけではない。

アンダーソンも良く避けたものである。流石という所か。

受け身を取って体制を立て直しながら、アンダーソンは毒づく。

「クッ、大刀をここまで上手く使いこなす者がおるとは」

アンダーソンも修業時代、『Great! 柳生十兵衛』に出てくる大刀使いに憧れて大刀の訓練をした事がある。だ

が、その時に今のシャークの様な動きをしたら見事に脱臼してしまつたのだ。

これでは使えるわけがないと思ひ諦めたのだが、目の前の銀髪の男は自分の体の一部の様に使っている。それは、アンダーソンにとつて嫉妬を誘う物だった。

恐ろしいほどの腕力と体の頑強さである。

アンダーソンを嫉妬させる者がいるとは、世界は広い物であった。

「オラオラッ、さっきの勢いはどうしたあ！」

体勢を立て直した直後のアンダーソンに、畳み掛ける様にシャークの大刀が襲う。

左手だったり右手だったり、攪乱しようと持ち替えたりはしている。

が、基本的には片手による大の上が大がつく大振りだ。

業界の中でもトップクラスの勘と、他の追隨を許さないほど優秀な足を持っているアンダーソンなら容易に躲せるレベルの筈であった。

が、

「い、こやつ！」

シャークから繰り出される大刀の刃を、いなしたり弾いたりしながらアンダーソンは唸る。

アンダーソンは、シャークの刃を躲す事が出来ていなかった。

アンダーソンが躲そうと描いていたラインに、必ずシャークの刃が来ているのだ。

いや、大きく躲す事なら出来る。だが、それではタイミング良く反撃して戦闘を有利に進められない。むしろ、躲して体勢を崩した所を追撃され不利になる。

アンダーソンはシャークの攻撃を受けながら思う。

そういえば、さつきこの鮫面の攻撃を咄嗟に躲した時、躲し終わる前に『チツ、外したか』と言っていた。という事は……。

アンダーソンは、状態を押し込むように前進する。

打ち込まれたノコギリ状の大刀を、弾きもいなしめせずに真つ正面から受け止めた。

軽く、火花が爆ぜる。

その瞬間、アンダーソンは右手を『Justice 正宗』から離し、シャークの顔の眉間を狙って打ち込んだ。

前後動作も何もない一撃である。

効きはしない。しかし、奇襲としては十分な物があつた。

避けるとしても、精々首を捻るぐらいしか方法は無いはずである。が、

「ぬーん！」

まるでアンダーソンの動きを予測していたかのように、既に顔の横に準備されていたシャークの手によってその一撃は受け止められてしまった。

その時、アンダーソンは確信する。

この鮫面、どうやっているかは分からんし、完全では無いようだが……間違いない、動きを読んでる！

自分の動きをある程度であっても読まれる。それは、考えようによつては相当に恐ろしい出来事であつた。

アンダーソンの首筋に、嫌な汗が流れる。

「SYAHAAA、捕まえたぜえ!!!」

アンダーソンの右腕を握りしめて喜々として叫ぶシヤークのイッた目が、その時のアンダーソンには何か得体の知れない物に見えた。

*

タオシエン
道神は、第三保管庫で例の時計を探しながらまたも焦っていた。

美術館の下の階で、破壊音が聞こえたからである。

「おそらく、鴉達と『Earth』の連中が交戦しておる」
鴉達……実は、アンダーソンが鴉の方に付いたのは筒抜けであった。

「だが、下で交戦しとるといふことは、まだ来ておらんといふことだ」

そう言って、自分を落ち着ける。

一体どういう理由かは知らないが、戦ってもまったく利益のない『Earth』の連中が鴉達と交戦してくれてい

タオシエン
るのは道神にとつて非常に有り難かった。

二回目の破壊音がする。同時に何か違う音がしたが、それと共に見つけた例の時計に道神は意識を奪われていた。

「ふむ、間違いないだろう」

一応持っている写真と確認する。間違いないようだ。やれやれ……鴉達が来る前になんとかなったか。

「見つかった。引上げるぞ」

後ろで探している筈の部下に告げる。が、返事がない。

「どうした？」

振り向くと、其処には部下の替わりに鴉が立っていた。

*

タオシエン
鴉は小馬鹿にした様な笑顔を道神に向けた。道神の部下は足下でのびている。

「老師、お疲れ様です。お陰で探す手間が省けました」

そんな軽口を言つて、紅龍会風の敬礼までしてみせる。道神は軽く溜息を付いた。

「私も老いたものだな、部下が貴様とすり替わつていゝるのに気付きもせんとは」

鴉の軽口など意にも返さずに道神はそう言い、微笑する。

その様子に、鴉は声を立てて笑う。

「気にする事は無い、すり替わつたのはたつた今だ」

その言葉には、道神も声を立てて笑つた。

「ふむ、とするとさつききの音か。音まで聞いていて気付かんとは、私も人の事を言えないぐらいに……」

其処まで呟いて、道神は鴉の視界から消えた。

「耄碌しておつた様だなッ」

そんな道神の叫びが鴉の耳に届いた時には、鴉はさつき居た位置から五メートルほど吹き飛ばされていた。

紙のように吹き飛ばされた鴉の体が、まるでボール球の様に地面をリバウンドしていく。

「ガッ」

腹部を強打されていて、発声もままならない。

叫んだ直後、鴉と三メートル程も距離があつた筈なのに、一瞬にして道神は鴉の腹部を肘で強打したのである。

アンダーソンなら消えた後、勘で避けようと思つぐらゝいの間はあつた。しかし、道神にはそれが無かつた。

アンダーソンとは比較にならないほどの速度である。

「カツ、ハッ」

何とか受け身を取つて立ち上がりながらも、鴉は軽く嘔吐した。息を吸うのも苦しい。

ガッ、マジかよ……しばらく見ないうちに……

道神は意外という顔を装つて笑つた。

「どうした鴉？しばらく見ないうちに、随分だらしなくなつたな」

……化け物ぶりが増してやがる。

鴉のそんな思考を知つてか知らずか、鴉の方に近づきながら道神は不敵に笑う。

「いや、失敬。だらしなかつたのではなく、元から

その程度だったかな？君は」

道神は、髭面の、明らかに高齢の男である。

普通の服を着て、孫達と戯れていてもまったく不思議ではない年齢をしている。

だが、そんな高齢などと微塵も思えない程の風格とプレッシャーが、今の道神の周りには渦巻いていた。

苦し紛れに、鴉は連射用でサンシャする。が、足さばきだけで道神は軽く躲してしまふ。

「どうしたね？攻撃のつもりだったのかね？」

そんな道神の様子を眺め、全身に冷や汗が流れるのを感しながら鴉は思う。

思いだせ、こんな化け物と俺は何度も戦っただろう？

対等以上に状況を持って行けた場合もあった筈だ。どうやった？どう動いた？心持ちは？奴の苦手な戦法は？

「どうした？セコセコ頑張って折角追いついたのだから。突っ立っていたら死ぬぞ？」

そう、道神が威厳さえ見せる余裕の表情で言う。

だが、その言葉で鴉は閃いた。というより思い出した。

思わず、顔を自らの手で覆ってしまふ。

……そうだった。道神相手に正面からとか馬鹿も良いところだ。俺はセコかったんだ。

その様子に道神は怪訝そうな表情を見せた。

「どうした鴉？まさか本気で打つ手無しか？」

そう道神が言ってくる。もう、距離は目の前に近い。鴉は首を竦めつつ、急いでタバコを吸う。この状況に

してその鴉の行動も、道神には理解不能であった。

「いや、ちよつと有り得ないなと思っただよ」

「何がだ？」

言いながら鴉は適当に何か探す。と、丁度道神の左手の包帯が目に入る。

「アンダーソン程度に遅れを取ったアンタが、俺をだらしないうって言うことさ。紅龍会の老師、人の上に立つ立場であるアンタが、アンダーソンみたいな馬鹿に遅れを取ったんだ。だらしなのは誰だろうな？」

道神の左手を指さしながらそう言うって、鴉はタバコの

煙を道神に吹きかけた。

多分、左手の傷はアンダーソンがやったのであろうという鴉の山勘による行動であった。外れていたらお終いであるし、冷や汗ダラダラの鴉の演技に存外道神が冷静だったら自殺行為も良いところである。

だが、山勘は当たり、効果もあつたようだ。ポイントが多分タバコであろう。

道神にしては珍しく、地獄から響いてくる様な低い恫喝の声で怒りを示す。

「鴉、貴様小僧の癖に調子にのりすぎだとは思わないか？」

「そう思うね」

間髪入れずに答えた鴉のその答えに、道神は一瞬呆気にとられた様な顔をする。

その一瞬の間で、鴉は飛び退きつつ既に青リムのマガジンが装填されていた『Crow』を道神の足下に放つた。同時に、手頃なガッチリとした美術品で体を支える。

撃鉄と爆音が、美術館二階の館内で弾ける。それ以外

の音が散った。

「何？」

道神が、予想通りに飛び退いて行く姿が爆煙で見えなくなるのを確認しつつ、片手で撃つたので痺れて仕方がない右腕を押さえながら物陰に隠れる。

美術館の二階フロアは巨大展示物が多い。一つの美術品で天井まで届く物も結構ある。

隠れられるような物陰や障害物には事欠かなかった。右腕の痺れと爆煙が晴れるのを待つ。

床を破壊したときの粉塵がかなり舞ったようで、右腕の痺れを取るには十分であった。

その間に、『Crow』のマガジンを赤リムの方に変えておく。

道神の姿が見える程度に爆煙が晴れると、鴉はすぐさま連射用の方で道神に散射する。

道神が散射を避け、弾の音から推測したのか鴉がいる位置に行く。

しかし、その時には鴉は既に別の物陰に移っていて、

同じように道神に散射した。

「クッ、鴉！出て来い！」

道神がそう叫ぶ、明らかに苛ついている。

その様子を見て、鴉は上手くいつているのを確認した。

「まったく、時計は持つてるんだから俺を無視してさつさと引上げりゃいいのに……怒らせといて良かったな」

そう、道神には聞こえない様に小さく呟く。

それを知ってか知らず……いや、知らないからこの場にいるのであるが、道神は忌々しげに舌打ちした。

「またかっ」

道神は、鴉のいつもの戦法に憤慨する。

実は、道神は鴉が苦手なのである。正々堂々正面から敵を粉砕する道神やアンダーソンと違って、鴉の基本スタイルは攪乱に攪乱を重ねて撃ち殺すという感じだ。

「反りが合う筈がない。」

鴉も倒す事は出来ないが、いつも道神は鴉に手こずって最後の方は依頼品や依頼自体を掠め取られるという

のが多い。まあ、鴉が叩き潰され逃げ帰ると言うパターンも多いが。

実は、二人はそんな因縁の仲だった。鴉はあんまり久しぶりだったので、いつもの感覚を忘れていたのである。

道神が位置に気付き、鴉は移動、散射。二回ほど繰り返す。

遂に、道神は無差別に隠れるのに足りそうな美術品を壊し始めた。

「鴉！正々堂々戦え！」

そんな道神の様子を眺めながら、鴉は苦笑して呟く。

「無茶言ってくれよ」

素手でコンクリートを軽く貫くような道神に、銃使いである鴉が正々堂々正面から戦える筈がない。これが、鴉が取るべき当然の戦法である。

鴉は西部のガンマンでは無いのだ。

「しかし、どっちにしる早く何かアクションが無いと

……」

……やられるな。

と鴉は思う。今の戦法が保てるのは爆煙がある間だけだ。爆煙が無くなれば、いくらなんでも移動中に道神に見つかってしまう。

丁度、鴉がそう思った時であった。

メキメキと音がして、美術館二階の床が軋む。

「むッ」

そのお陰で散射の弾が掠めたのか、傷が痛んだのかは分からないが、道神が包帯を巻いた左手から時計を離れた。

空中に、依頼品である時計が舞う。

それを逃す鴉では無い。風のように飛び出して、時計が床に落ちる前に掴んだ。

このままトズラすれば……。

鴉が振り返ると、其処には既に道神がいた。一撃入れようと構えている。

……無理だ。避けられん。

そう思つて、鴉は時計を道神が取れるか取れないかの空中の微妙なラインに投げた。

「チッ！」

唸つて、道神が時計を取ろうと手を伸ばす。が、それが命取りであった。

崩れた体勢の道神に、鴉が赤リムの『Crow』の一撃を撃ち込んだのである。

重たげな撃鉄音と、銃声の乾いた音が、その場の音を飲み込む。

道神は完全に無防備だった。包帯の付いた左手を何やら掲げてはいるが、流石に素手で弾けるわけは無いしもう避けられもしない。

が、

「フンッ！」

という道神の気合いを入れるような声と共に道神が左手を振る。と、道神の左手の甲、包帯が特に念入りに巻かれていた部分で、まるで何かを弾いたかの様に火花が爆せた。

カンッ、という乾いた音と破壊音がして、道神の斜め後ろに置いてあった美術品の一つが砕ける。

り見えるな、クソツタレ！

と鴉が心の中で毒づくのと、道神の鳳拳が鴉を捉えたのは同時だった。

*

アンダーソンが突然撃ち込んできた全くの奇襲であった筈の拳の一撃を、難無く察知してシャークは受け止めた。

「SYAHHAHAHA、捕まえたぜえ!!!」

そのまま捻り潰してやろうと、自分の元に引き込む。その時、シャークにはアンダーソンの頭から左腕に何が走ったのが分かった。

「チッ」

と呟きながらアンダーソンの左手を離し、離れた手で大刀を僅かに持ち上げる。

殆ど同時に、大刀を移動させた場所をアンダーソンの『Judgement 村正』の刃が襲った。

シャークに右手を受け止められたアンダーソンは、咄嗟に『Justice 正宗』を手放して『Judgement 村正』を引き抜いていたのである。

シャークの眼前で、火花が爆ぜる。

受け止めるとすぐさまアンダーソンを押し飛ばし、大刀を振込む。

大刀を振込む前に、アンダーソンの体がシャークの視界から消えた。シャークの目ではアンダーソンの動きを追いつけていない。しかし……

「SYHHAHAHA」

シャークが笑いながら打ち込んだノコギリ状の大刀は、しっかりとアンダーソンの動きの線上を捉えている。……アンダーソンの体が消えようが、見失おうが、シャークには関係の無い事であった。

何故なら、シャークはアンダーソンが動き出す前に、アンダーソンの中を爆ぜて走る物を見て自らの動きを決めていたからである。いや、見るといふ表現は遠い。感じるに近い。

シャークは、爆ぜて走る物を感じて次々に大刀を振り回す。

どうしようもない程の大振りであるはずなのに、アンダーソンは避けることも出来ず、その威力だけは十二分にある一撃一撃を受け止めるしかなかった。

シャークの大振りの線上にあつた柱群が、音を立てて粉碎されていく。

シャークが『動きを読んでいる』とアンダーソンは感じていたが、それは実はかなり近い。

正確には、動きを読んでいるのでは無い。大まかだが感じる事が出来るのだ。

一般的な鮫の習性や生態系をご存じであろうか？一般的な鮫は生き物の神経を通様な微弱な電流をも感知する事が出来る。目があまり良くないので、それで獲物を細かい位置を特定していると言われている。その為、鮫は電流に敏感だ。

例えば、鮫の傍に乾電池を落としてみるとする。すると、鮫は慌ててその電池から離れ、絶対に近づこうとは

しない。感知する電流が強すぎるからだ。

その鮫と同じような能力が、シャークにはあつた。

シャークには、それは相手の体の中で何かが爆ぜ走るという風に感じる事が出来る

それによつて、相手が動き出すタイミングと方向などが漠然と分かるのだ。

だが、所詮人間なので雲をも掴むような感覚ではある。大体あつているという程度の不確かな物ではある。

しかし、シャークたちの様な者達にとつて、大体感知できるといふのは驚異的な武器であつた。その能力のお陰で、シャークは今まで生き残つていられるとも言える。

そしてそれは、この男がシャーク（鮫）と呼ばれている所以でもあつた。

「SYAHAAA、突っ立てるだけじゃいずれ崩れるぜ!!!」
叫びながら、シャークは大刀を打ち込む。

受け止めてはいるが、さつきから有効的な攻撃に移れないアンダーソンは徐々に押されている様に見える。

顔には、焦りの色が見えた。

焦ろ、焦ろ、焦りがテメエの隙を誘う！

それが、シャークの狙いであつた。一見すれば大刀で力押しで迫るようなシャークであるし、実際の場合殆どがそうなのだが、この様な小競り合いも出来る男である。まあ力で押しして小競り合っているのだから、やはり力押しなのには変わりはないが。

シャークは思う。

確かにコイツは強い。あんな細い棒みたいな刀で俺の大刀を受け止めやがるし、消えるような速さの足も持っている。俺には劣るが、腕力も相当な物だ。勘も無茶苦茶良い。しかし、残念なことに相手が悪い。

「だつてよ……」

シャークの何発目かの打ち込みで、よろめいたアンダーソンの足が何かに躓いた。

アンダーソンの体勢が、隙だらけといわんばかりの状態になる。

喜々として、シャークは叫ぶ。

「正面からの白兵戦で俺に敵うわけねえだろ!!!」

シャークの一撃で、アンダーソンは自分の背にした柱もろとも碎け散った。

*

自分の体が、紙風船の様に軽々と飛んでいるのが分かつた。

「羅ア！」

という道神ダオシエンの必殺の叫びが、耳に遅れて届く。

自分が碎け散らずに飛んでいるという事実も、何処か夢見心地である。

そんな認識をした直後、時間感覚が現実に戻った。

巨大で頑丈そうな美術品の数々に、次々と風穴が開いていく。

ドドンツ、という人間の体が出したとはとても思えない破壊音を立てて、鴉の体が突き抜けていったのである。四個程美術品に風穴を開けた後、ゴムボールの様に跳

ねから鴉は停止した。遅れて、風穴が開いた美術品が崩れていく。

「グッ、ガハッ」

うずくまったまま、鴉は口から吐き出す。今度は嘔吐所ではない。血反吐を吐いている。

鴉が、自分のミスではなく敵からの攻撃で血反吐を吐くのは随分と久しぶりであった。

「クッソ……ゴハッ」

胸が、死ぬほど痛い。というより、間違はなく肋骨がおれている。

息をする度に気絶しそうなほど痛い上に、鴉の胸はまともな形で上下していない。

いや、そもそも意識を失っていないのが奇跡的であった。立ち上がる事も出来ない。

「ふん、コイツを貴様に入れたのは初めてであったな」
そう言いながら、道神がゆっくりと鴉に向かって歩いてきた。

もう余裕なのか、自らの長い髭に手串を丁寧に通している。

猛者の証拠でもある。勝者の風格がそこにはあった。が、道神は残念そうに舌打ちする。

「アレを喰らって寝ておらんとはな……流石と言った所か。だが、果たして寝てしまうのと苦しみに耐えて起きておくと、どちらが良かったのか」

ヒューヒューと、何処かが漏れてしまっている鴉の呼吸音を聞きながら、道神は微笑した。

何処か、慈愛さえも感じさせる微笑である。

鴉はいえ、完全に戦意が喪失していた。何か対策を立てようとも、時間を稼ごうとも思えない。

そもそも、上半身以外動かない。

鴉との距離を半分ほど縮めたところで、道神は止まった。

ゆっくりと、鴉に対する死刑宣告でもあるかのよう
に、道神は足に全重心を乗せる構えを取る。

「……楽にしてやろう」

囁くように呟いて、道神は爆ぜた。

*

シャークの一撃で、アンダーソンは自分の背にした柱もろとも砕け散った。

かのように見えた。

「許せ」

そう叫んで、アンダーソンは跳んでシャークの大刀を躲しながら『Judgment 村正』をシャークに向かってダーツの要領で投げた。無論、さっきの叫びは『Judgment 村正』に対してのものである。

シャークが隙だらけだと思ったアンダーソンの体勢は、アンダーソンのフェイクだった。

残っていた軸足で蹴り出して、アンダーソンは大刀を躲したのである。

「チィッ」

そんなアンダーソンの動きは、流石のシャークも例の感覚だけでは読めなかった様だ。

明らかに動揺して、アンダーソンの『Judgment 村正』

を避け損ねた。

『Judgment 村正』が、シャークの肩に突き刺さる。

「ガッ」

それにシャークが気を取られた一瞬の隙に、アンダーソンはシャークの視界から姿を消す。

それには、シャークも何も対応出来なかった。

アンダーソンの動きが、例の踏み込んでくる時の動作ではなく、それとはまるで反対の動きだったからだ。元々目では捉え切れていなかったシャークは、隙を突かれた間にアンダーソンを見失ってしまう。

「クソッ、何処行った」

などと言ってシャークがアンダーソンを探している間に、アンダーソンは近場の柱に隠れる。

シャークが忌々しげに『Judgment 村正』を肩から抜き、投げ捨てる。

その隙に、アンダーソンは隠れていたシャークの後方にある柱から飛び出し、後ろから『Justice 正宗』で斬りつける。

シャークも咄嗟に対応したが、さばききれずに『Justice 正宗』の刃が肩を掠めた。

「アメモエ！」

と言つてシャークが激憤している間に、またも違う柱にアンダーソンは隠れる。

アンダーソンは思う。

カラクリは分からないが、あの読みはどうも至近距離にしなければ察知出来ない様だ。

……いける！

シャークの様子を眺めながら、アンダーソンは小さく呟く。

「このまま至近距離から奇襲を掛けていけば」

と、そう思った時、アンダーソンは自分の中で嫌な物がわだかまっているのを感じた。

奇襲……ですと？

アンダーソンの位置を察知できないシャークは、苛つきながら叫ぶ。

「オラッ！どうしたあ！いきなり臆病者の戦法か！」

臆病者……だと？

シャークを冷静に観察しながらも、アンダーソンの眉間はピクリと動いた。

「鴉みたい事を始めやがって！そういうの、慣れてない様に見えるんだがなあ、始めてか？」

始めて……。

確かに、隠れて攻撃する戦法などアンダーソンにとつて始めて行う戦法ではあった。ただ、『Great! 柳生十兵衛』でそういう描写があったから知っていただけで。

浮かんできた疑問に、アンダーソンは首を振る。

いや、奇襲も立派な兵法の一つだとかの柳生十兵衛も言っている……。

「初めてだろお、大変だなあ！俺と正面から戦う自信が無いんだろ？怯えてんだよなあ！」

そんな風に、シャークは続ける。

怯える……まさか。

アンダーソンは怯えてなどいない。確実な方法を取っているだけであった。

「そんな言葉に……乗りはせん」

だが、アンダーソンの眉間には既に血管が浮き出し
ている。

「まあ、責めはしねえよ。弱者の兵法ってヤツだもん
な⁽¹²⁾」

そう言つて、シャークは「SYAHAAA」と高笑いする。
ブチッと、音がして、アンダーソンの何かが弾けた。
我慢の限界であつたのだ。

思わず、堂々と柱から出てしまつていた。

シャークが、アンダーソンを認めてニヤリと笑う。

「出てくると思つたぜ」

アンダーソンは、それに答えるように不敵に笑つた。

「鮫の dismantle (解体) をしたくなつたんだス YOー」
いつの間にか、喋り方も元に戻つてしまつている。

……やつてしまったものは仕方ありません——
ン。

アンダーソンも短気な男であつた。

戦闘中は基本的に恐ろしく冷静に男でもあつたが、馬

鹿に馬鹿にされては黙つていられなかつたのである。

自分が馬鹿だという事は棚に上げている。いや、気付
いていないのかも知れない。

『その reptilian (爬虫類) と同レベルの足りない brain
(脳) を切り刻んであげマ Suー』

そう叫んで、アンダーソンは例の『ぶっ殺してやる！
掛かつて来い！』の構えを取る。

言葉遣いこそ変なままだが、完全に頭に血が上つてい
た。

「SYAHAAAA、やつぱお前も短気だつたんだなー」

そう叫んで、シャークは大刀を打ち込んでくる。

シャークの大刀の質量は、アンダーソンの『Justice
正宗』を優に三倍を超え、刃渡りに渡つては二倍ほどあ
る。

そんな強大な凶器を相手に、アンダーソンは躲すでも
なく、いなすでもなく、弾くでもなく、『Justice 正宗』
の刃をそれに斬りつけた。

むしろ、元からソレのみを狙つていたという動きた。

「ああ!」

普通、アンダーソンの『Justice 正宗』の様な日本刀でシャークの大刀に斬りつけたら、刃こぼれするだけである。

が、アンダーソンによって繰り出された『Justice 正宗』は自らが刃こぼれすどころか、シャークのノコギリ状の刃の一部を削りとった。いや、切り取った。

「Fu、……」

その様子を眺め、不敵に笑いながらアンダーソンは思う。

始めからこうしておけば良かった De ス。あの long sword (大刀) に驚いて、弾くやいなすなどしてしましたが、私の性^{サガ}に合う筈があります Se ン。

「そう、いつもの私の様に、大刀ごと叩き切れば良かったのデス!」

そう、アンダーソンは堂々と叫ぶ。

切れた上での開きの発言ではあるが、堂々と言えば格

好良く見えない事も無いものである。

「やってみろや、金髪エセ侍が!」

そう叫んで、シャークも応戦する。

二人は、相手を一撃で切り伏せるつもり^のの必殺の猛進を掛けた。二の太刀は無い。

二人の間には巨大な柱があった。普通ならば、ぶつからない様に避けて戦う。

が、シャークもアンダーソンも、互いにそんな物は気にも止めない。

「たたっ切 Ru!!!」

「SYAHAAA!!!」

二人の叫びがぶつかる。その瞬間、柱の位置を接点として、シャークの大刀とアンダーソンの『Justice 正宗』もぶつかり合った。

両サイドからの猛烈な一撃を食らって、巨大な柱は粉々に碎け跳ぶ。そして……。

「正しき者、つまり Justice^{正義}が勝つ。それが世の理^リ」

ス」

そう、切り抜いた体勢のままアンダーソンは呟く。

そんなアンダーソンの目の前の床に、半分にされたシヤークの大刀の刃先が音を立てて突き刺さった。

アンダーソンの『Justice 正宗』刃は、三倍以上の質量をもともせずにシヤークの大刀を半分にしたのである。アンダーソンの勝利であった。

「Finish デス、YOU はもう無防備デス YO—」
が、シヤークは大して驚いた様子もなく、不敵に笑って言う。

「そいつはどうか分からないぜ？」

「What?」

何かと思ひシヤークの視線を追って手元を見てみると、『Justice 正宗』の刃に亀裂が入っていた。所々欠けている。

「!?」

アンダーソンにとって、それは衝撃的な出来事であった。

苦楽を共にし、幾多の戦場でアンダーソンを危機から救っても傷一つ付かなかった『Justice 正宗』の刃である。

それは、アンダーソンの魂に亀裂が入ったも同然だった。

「OH—」

「それに、無防備じゃねえ、まだコイツに刃は残ってる。まだ使えるぜ」

そう言うって、シヤークは長さが半分になった大刀を振りかぶる。

アンダーソンも身構えた。そこに、ピシッ、という大きな亀裂音が走った。

「!?」

二人とも驚愕し、後方に跳ぶ。直後、二人が居た位置に大きな瓦礫が降り注いだ。

と、美術館全体が揺れ始める。

実は、シヤークとアンダーソンが破壊した柱は美術館全体の重心を支えている物だった。

本来ならそこだけが壊れても何とかなるが、派手な戦いで柱類を破壊しまくっていたので何ともならなかったのである。

美術館を支える最終ラインが破壊され、美術館は天井から壁から崩れ始める。

シャークは舌打ちした。

「タイムアップか！まあいい、十分暴れたしトズラさせてもらうぜ」

そう言うって、今までただ黙って観戦していたアウルと共にアンダーソンに背を向ける。

「逃しません！」

アンダーソンは逃すまいと追う。が、突然目の前に瓦礫が降り注いだ。

「チッ」

急いで飛び退き、躲す。

その時には、既にシャーク達を見失っていた。

「……鮫面め、覚えておきます」

そう呟いて、鴉の所へ向かう。

鴉タオシエンといい、道神タオシエンといい、あの鮫面の男といい、まだ

まだ世の中には手練れがいマスZe。

悪を逃がしてしまったにも関わらず、アンダーソンは何処か嬉しげだった。

*

ゆっくりと、鴉に対する死刑宣告でもあるかのように、道神は足に全重心を乗せる構えを取る。

その体勢を見て、完全に戦闘意欲が無くなっていた鴉の頭が、やけそ気味に働いた。

落としていた『Crow』を、ヨロヨロと握る。

「……楽にしてやるわ」

囁くように呟いて、道神タオシエンは爆ぜた。

その瞬間、鴉は『Crow』をただ真っ正面に撃つ。道神を狙ってではない。ただ、自分の正面に撃つのだ。

鴉の閃きとは、道神のアンダーソンをも超える速さは、足さばきによるものでは無く跳躍力によるものではないかというものであった。

もし、完全に跳躍力によるものだけの速度なら、一方にしか進めない。つまり、鴉の正面から跳んだら正面からしか攻撃出来ない筈なのである。

つまり、この位置からならただ正面に撃つだけで当たる筈であるというものだ。無論、道神の速さが足さばきによるものであったらアウトである。

ハッキリ言えば、鴉は苦し紛れに『こうだったら自分は助かるのに』という希望的観測な予測を立てて実行しただけであった。

しかし、忘れて貰っては困る。鴉はアンダーソンの斬撃を勘だけで何度も避ける様な男だ。

苦し紛れの鴉の勘には、他を抜きんでている物がある。鴉とて、強敵を相手にセコ戦法ばかりで生き抜いて来たわけではないのだ。

そして、鴉の勘はあながち外れていなかった。

「何?」

道神は鴉が『Crow』を構えたのを認めた段階で、自らが行っていた必殺への跳躍を中断して横へ跳ぶ。

道神は確かに、跳躍していた。だが、届くまでにはツーステップまで踏んでいる。

中断するタイミングがあったのだ。

鴉の勘は大方当たったが、目論見は外れたといえる。が、道神は不運だった。道神が回避行動を取った瞬間、美術館が大きく揺れたのである。

回避行動を取るのに、瞬間的なタイムラグが出来た。例え瞬間的な遅れであっても、基本300〜360m毎秒を誇る速度の弾丸を完全に躲す事は出来なかったのである。

『Crow』から放たれたタンングステン弾が、道神の左腕を掠める。

「グッ」

しかも、さらに道神は不運であった。普段なら耐えられるその衝撃に、アンダーソンの為に痛んだ左手の握力

が、緩んでしまったのである。

ポロツと、面白いようにあつさと道神の手から例の時計が離れた。そのまま慣性の法則に従って真つ直ぐ跳んでいき……

「おや」

……取ろうと手を伸ばした鴉の義腕である左手に、見事なほどスツポリと収まる。

「おやまあ、あつさと」

そう呟くその時の鴉の気分は、何とも言えないものであった。

折角手に入れたはいいものの、肋骨は折れ、血反吐は吐いているし、満足に立ち上がる事出来ない。

「……」

道神が、冷めた目で鴉を見つめる。

しかも、コイツを取るために『Crow』もほっぽり出してしまった……。

時間稼ぎすら出来ない。という状況であった。

無言で、道神が鴉へと向かう。

既に何も出来ない状況の鴉であったが、果敢にも這い蹲って逃げようと試みていた。

が、あつさと道神の足に踏み押さえられてしまう。時計を持つている左の義腕を抱えられ、体は道神の足によつて床に押しつけられる。

バキバキと胸から音がする。自分の肋骨がポロポロになつていくのが分かった。

鴉は血反吐を吐く。

「さて、頭を潰されるのと。このまま体を踏み砕かれるのと、どっちが好みだ？」

そう、冷徹に道神は言う。まずは殺してから奪おうという算段である。

鴉は血反吐を吐きながらも不敵に言う。

「いいのか？この義腕も中々握力はあるんだぜ？お前が俺を踏み殺したらショックでこの時計を握り潰すかな」

そう、鴉は恫喝する。

もう依頼がどうのこうのではない。既に鴉は生きる事

しか考えていなかった。

アンダーソンが来るまでの、時間稼ぎをしようとして
いるのである。

敵にアドバイスなんぞしてスマン……はやくシャー
クをぶつ殺して来てくれ。

そう、ひたすら祈る。鴉も自分勝手な男であった。

そんな鴉の心情を読み取ったかのように道神は言う。

「ふん、時間稼ぎか？今、貴様は思っているのだろう
な、あの金髪が早く来て欲しいと」

そうして、道神は嘲笑した。

アンダーソンであったならばプライドを傷つけられ
たのかもしれないが、鴉はそんな男では無い。血反吐を
吐きながら言った。

「悪いかよ。時間稼ぎも立派な兵法だぜ？」

……知らんが。

そんな事を言いながらニヤリと笑ってみせる。もうハ
ツタリぐらいしか出来る事は無い。

すると、道神は一瞬思索するような顔をしてから、軽

く目を閉じて言う。

「一つ指摘しておこう。貴様は選択を間違っている」

「何がだよ？時間稼ぎか？」

急に師の様な態度を取り始めた道神に怪訝な顔を向
けながらも鴉は尋ねる。時間稼ぎになるからだ。

道神は軽く首を振った。

「違うな、お前がココに来たことだ」

ますますわけが分からない。今回の仕事を放棄するべ
きだったと言いたいのか？

そんな事を掠れ声で尋ねると、道神は「愚かな」と呟
いて首を振った。

「違う。私が言いたいのは、お前は下に残ってあの金
髪をこつちに寄越すべきだったと言っているのだ」

「へえ、俺では役不足か？」

正に足蹴にされて床に押しつけられている最中の鴉
が言っても、この台詞は決まらない。

道神はフツと呆れるように笑った。

「当然であろう？自らの体の鍛え方が足りず、あのよ

うな銃おもちゃに頼っている程度の輩では当然役不足だ」

そう言って、道神は『Crow』に向けて顎をしゃくつた。

「ふむ……なるほどね」

言われて、鴉は冷静に言葉を返す。が、既に鴉の心の中は撃鉄は弾かれていた。

随分と久しぶりに、鴉は切れたのだ。

自分をいくら侮辱されても平気な鴉であったが、自分の愛銃『Crow』を玩具と言われて冷静でいられる男ではなかったのである。

色々と、依頼を受けている以上守るべきモラルとかも吹き飛んだ。

「なるほど、良く分かった。時間稼ぎは止めだ。疲れ」

そう言って、時計を握りつぶす。

より先に……

「遅い」

……道神に左腕を引き千切られてしまった。

ブツンツと、神経が断裂する痛みが走る。

金属で出来た腕が関節からもぎ取られ、歯車や機械部分飛び散る。血も、少し飛び散った。

が、所詮は義腕であるので大した痛みは無い。が、左肩が妙に熱かった。

契った反動で逃げようと鴉はもぐが、道神のあしでしっかりと押さえられて逃げられない。

鴉を足蹴にしたまま、道神は言う。

「随分しっかりと握ってあるな。潰すのは間に合わなかった様だが、ココで外すのは無理か」

「貰っていくぞ」と、道神は事も無げに言う。

それは鴉の腕だけでなく、鴉の命もあつたのか、道神の足に力が込められた。

……まったく、一矢も報いれないとはね。

と、バキバキと折れていく肋骨を感じながら鴉が思った時、美術館がまた大きく揺れた。

さっきのとは比べものならない。崩壊するのではない

かという振動である

事実、それはアンダーソンとシャークが柱を粉碎しまくった事によつて起こった。崩壊への振動である。

あまりの大きな振動に、道神はバランスを崩す。

道神の足の力が緩んだ隙に、鴉は崩れて坂になった床を滑り落ちた。その最中に『Crow』を回収しておく。

その様子を見て、忌々しげに道神は舌打ちした。

「チツ、これは崩壊するな。下の連中暴れまくりおつて……時間が無い。鴉はお預けか」

そう言つて、踵を返す。

『待ちやがれ！』と鴉は叫ぶことも出来ない。もう生き残れるなら依頼失敗もやむなし、という気分にはなつていた。アンダーソンも間に合いそうにない。

が、その二人ではなく、もつと全然違う物が道神の足を止めた。

道神の、携帯が鳴つたのである。

「阿ゝ、喂喂（もしもし）。私だ」

崩壊していく美術館の中で落ち着いて携帯に出る道

神にも恐ろしいものがあるが、その電話の内容は道神にとつて恐るべき事実を伝えた。

『老師、大老師が先刻亡くなりました』

その時、時間が確かに凍った。

道神が、当初からもつとも恐れていた自体が起こつてしまつたのである。

ワナワナと、体を震えさせる。手で顔を覆つた。

その様子を見て、鴉も何となく電話の内容が分かる。

「逝つたな……」

そう、鴉は呟く。

道神は携帯を握りつぶし、顔を真っ赤にさせて地面に拳を叩き付けた。

「それでは、こんなゴミ！何の価値も無いではないか」

道神の拳を叩き付けられた床が、音を立てて粉碎される。道神の足場付近だけが残り、デカイ風穴が開いた。一体、どういう構造の拳なのだろう？

「私の苦勞は、費やした部下の命は……」

そう唸りながら、今にも鴉の義腕ごと時計を握りつぶさんと手に力を込めている。

それを、鴉は制す。

「あー、察するに、もう要らないのだから？それ、潰さずに置いてくれない？」

そう言つてなんとか鴉は立ち上がると、残った右手を掲げる。

道神はしばらく苦虫を噛み潰した様な顔をしていたが、盛大に舌打ちすると鴉の方に義腕を投げて寄越した。例の時計も一緒である。

そうして、今度こそ踵を返して去っていた。

*

警察に見つからない様に逃げながら、道神は呟く。

「ふん、今回は全てが無駄になったわ。だが、考えようによっては毫碌した爺がやっと死んでくれたという事だ……随分と助かる」

そう自分の年齢は柵に上げて、道神は憎々しげに吐き捨てた。その憎悪は、恐らく本物であっただろう。

では、何故道神は涙を流しているのか？

その理由は、流している本人ですら分からなかった。

*

天井や床が本格的に崩壊していく美術館の中、道神を見送りながら鴉は呟く。

「さて……手に入れたのはいいけど、どうやって逃げるか」

依然として、生命の危機であった。

既に、鴉にはこの美術館から脱出するだけの体力は残されていない。このままでは瓦礫の下敷きに成って終わりである。

「取りあえず、もがくだけが……」

言葉を言い終わる前に、鴉の腰がストンと落ちた。まだ崩れていない床にへたり込む。

どうも、これ以上鴉は動けない様子であった。

「いや、まてまてコレで死ぬのは流石に……」

這い蹲って進もうとしたとき、天からの光明の様な声が聞こえた。

「クロウ！加勢しにきました Yo-」

アンダーソンである。これほどこいつの存在に感謝した事は、鴉は未だかつて無かった。

アンダーソンは鴉の姿を認めると、酷く驚いた様子で言う。

「クロウ！大丈夫デス ka? 道神は?」

「大丈夫じゃねえ。道神は帰った」

その言葉に、アンダーソンは依頼が失敗したと思ったのだろう。悲しげな顔を見せたが、鴉の右手に握られた義腕に握られた物を見て感嘆の溜息を漏らした。

「流石クロウ……あの強者、道神を相手 N:……」

実際は、道神が要らなくなったので鴉が拾ったというだけである。

そんな事は知らないアンダーソンは、鴉に尊敬の眼差しを向けた。

「クロウ、動けまます ka? 美術館は崩壊を始めてますし、外は police 達に囲まれていマス。逃げないと不味いデス」

なるほど、警察もいるのか……それは逃げんと不味いが……もう無理だ。

鴉は、自分の意識が遠のいていくのを感じた。

「スマン、俺はもう無理だ。後は任す」

「What?」

まるで最後の言葉の様にも聞こえたのだろう。アンダーソンは妙に慌てて「死ななくてくだ Sa——イ」などと言っている。

死体だと思われて放置されたら困るので勘違いを正したかったが、どうもその時間も無いようだと思っ

た。

最後に呟く。

「アンダーソン」

「クロウ！」

「お前、本当に思った以上に使えるな……」
と言つて、鴉は薄れていく意識を手放した。



—Chapter6 『終幕』—

さて、鴉達の例の美術館の騒動から既に一週間ほどたつている。

鴉はあの直後、婆さんの代からの懇意にしているという沙羅が手配した病院へ緊急入院し、その日のうちに緊急手術をした。ちなみに鴉の自腹である。

アンダーソンは死体だと思つて鴉を運んだようだ。危うく火葬される所を沙羅に止められたらしい。その事については、鴉は病院代をアンダーソンが全額負担する事で許していた。

さて、現在も要入院中の筈の鴉であるが、実は病院を

抜け出していた。

吸つてはいけなと言われているタバコを吸いながら鴉が向かった先、それは喫茶『無道』であつた。ソーランドも捨てがたかつた様だが。

「また、ご最頂に〜」

喫茶『無道』の前、例のどろける様な笑顔で沙羅が黒のリムジンを見送つていた。

その様子を見て、鴉はゲンナリと溜息を付く。

「間に合わなかつたか……」

そんな鴉を、沙羅が認めた。

「鴉……あんた入院中じゃなかつたっけ？」

そう言つて怪訝そうな顔をしている沙羅に、鴉は首を竦めて答えた。

「抜けてきた。依頼主がどんな顔して受け取るか見てみたくてね」

今日は、依頼品の受け渡しの日だったのである。つまり、今去つていったリムジンがそうだ。

鴉は、まったく意味を成さなくなつた依頼品を依頼主

(つまり紅龍会の昇天成された大老師の仲介者)がどんな顔で受け取るのか見てみたかったのだ。

「遅かったわね、害虫を嘔み潰した様な顔をしてたわよ」

そう言つて、沙羅はケタケタと笑う。人の不幸が好きなのだ。

それは、鴉も然りである。二人揃つて笑い出した。大方笑い合つと、沙羅は言う。

「まあ、入りなさいよ。セルフのコーヒーなら出すわよ」

何だか、今日は妙に沙羅が優しいような気がする。金が入ったからゴキゲンなのか？

「せめて作つてくれよ」

言いながらも、鴉は喫茶『無道』に入った。すると、其処にはアンダーソンが居た。

「OH！クロウじゃないデスKa！もう退院したのデスKa！」

「馬鹿、抜け出してきたんだ。お前が火傷を作つたせ

いでちよつと長引くんだよ」

「面目ない……」

アンダーソンはしよげる。実は、アンダーソンは鴉を火にくべる所までいったのである。

と、既に電源が入っていたTVからニュースが聞こえてきた。

NKH (日本協会放送) だ。

『えー、連日ニュースを賑わせております美術館全壊事件ですが、警察の調査によつて欠陥工事の原因と分かりました。警察側は、この美術館の建設設計を担当した兄齒一級建築士に逮捕状を出し、昨日緊急逮捕しました。昨日、逮捕される時の映像があります』

そうして、映像は切り替わつた。

『えー、ただ今、兄齒一級建築士の自宅前に来ております。警察が取り囲む中、喧噪とした雰囲気が……あ、出てきました。兄齒一級建築士です。兄齒さん、どうして美術館が全壊するような大規模の偽装を行ったんですか？兄齒さん』

映像は途絶えていた。

『次のニュースです。先日、山中に飛行機が墜落したという情報が寄せられました……』

そこで、沙羅はTVの電源を切った。

「……あのおっさんも気の毒に」

鴉は、メガネを掛けて冴えない顔をした兄齒というおっさんの顔を頭に思い浮かべ、軽く首を振る。

「それでもないわよ……どうも、建設設計の書類を偽装したのは本当らしいもの」

沙羅は平然とそう言う。

だが、鴉はタバコを燻らせて神妙な顔をした。

「いや、それでもあの扱いは酷いだろ……全壊したのは俺らの責任なわけだし」

「自業自得でしょ」

間髪入れずに沙羅は言う。

それに、アンダーソンが異を唱えた。

「しかし、いいのですか Ne? 歴史的には間違いが残るわけですが……」

アンダーソンが珍しくまともな事を言う。

鴉は軽く肩を竦めてみせた。

「いいんじゃないの、歴史なんてさ、所詮大衆の為の物だろ? 大衆が真実と思つた事が真実になっちゃうわけだし、大衆が真実と思つた歴史が本当の歴史なのさ」

「Jum」

そう言うのと、アンダーソンは頭を抱えて唸りだした。まったく、面倒な奴だ。

「ハイ、コーヒー」

そう言うって、沙羅が片手で例の時計を拭きながら、もう片方の手でコーヒーを出してくる。器用な奴である。

「お、セルフじゃねーな」

今日は本当に優しいなあ、と思ひながら鴉はコーヒーを飲む。

うん、例えインスタントであつても人が作つたというだけで大分違う。沙羅が例の時計を布きれで拭いているのを尻目に飲むのもオツなもの……って、時計は

「おい、その時計!」

鴉がコーヒーを吹き出して叫ぶ、アンダーソンも気がついた様子だ。

「サ、沙羅サン？ど、どういウ……？」

「あ、コレ？貰ったのよ。要らないって」

「ハァ!?!」

アンダーソンと二人絶叫した。沙羅はすまして答える。「何でもね、もう依頼主が死んでるのに自分がソレを持ってたら紅龍会に睨まれるってんで、受け取ってくれだつてよ」

そう言つて、沙羅は奥から脚立を取りだすとTVの下に飾り始める。

アンダーソンは開いた口が塞がらない様だ。

「わ、私たちが苦勞して取つてきたの Z……イラナイ……」

「いや、そんな事はどうでもいい依頼料は？」

「貰ったわよ。受け取り料として」

なら……別にいいじゃねえか。

鴉はホツとした。脱力して、椅子に深く座り込む。

あまりにシヨックだったのか、アンダーソンは机に突っ伏して呆然と眩く。

「Oh……一体何の為に、多くの者達が Blood (血) を流したの Kai」

その言葉に、鴉と沙羅は顔を見合わせる。

二人とも、ニヤリと笑つて答えた。

「おぜぜの為」

そうして、鴉と沙羅は笑い合う。鴉はタバコを燻らせる。

吐き出された煙は綺麗に円を描き、所々染みが付いた喫茶『無道』の天井まで上つていく。

やがてそれは、天井に吸い込まれる様に消えていった。

【あとがき】

『——八年ぶりだね』

思わず、そんな言葉が漏れました。

厨二ど真ん中だった……あの頃。そんな時代の遺物になります。

如何だったでしょうか？

訳あって、この赤面モノの作品を修正する事も出来ずに晒す事になって

しまいました。が、僅かでも皆様の暇つぶしの一助になれば幸いです。

それでは皆様、いい夢を。



お手に取って頂きありがとうございました。

是非、こちらまで感想を頂ければ幸いです。

<http://form.mag2.com/drephoutri>